

装飾馬具は下賜品か

—「威信財説」への疑義—

中村 倉 司

はじめに

一般的に装飾馬具は、その華麗さと技術的な面から見て大王やそれを補佐する畿内豪族に管掌された工人によって製作されたと考えられている。そのため製作地は、必然的に畿内と想定されている。つまり全国各地から出土する装飾馬具は、大王や畿内豪族から地方豪族に下賜されたものと捉えられる傾向にある。それ故、これらは被下賜者にとって威信財としての側面も併せ持っていると考えられている。

装飾馬具とは飾りを付した馬具の総称であるが、それは実用馬具としての性格を否定するものではない。装飾馬具は多様であり胸繫に限っても馬鈴・馬鐸・杏葉などがある。更に杏葉に限っても剣菱形・心葉形・楕円形・花形・鐘形・棘葉形の他に鈴杏葉などがある。そして、これらは定型化しているとは言え、それぞれ細部には異なる文様が施されている。このような多様性(差異)を各氏族に管掌された工人の差にその原因を見いだそうとしたことがあった。つまり、馬鐸はA氏族、鈴杏葉はB氏族、心葉形杏葉はC氏族と言うように……。しかし、各畿内豪族の故地に特定の馬具が分布するような状況は見られず私の夢想は霧消してしまった。20数年前のことであるが、今も装飾馬具の多様性の意味を解明する見通しは立っていない。にも関わらず本稿を草するのは、当時集成した各種馬具を概観することによって、何かが見えて来るのではないかという淡い期待があるからである。

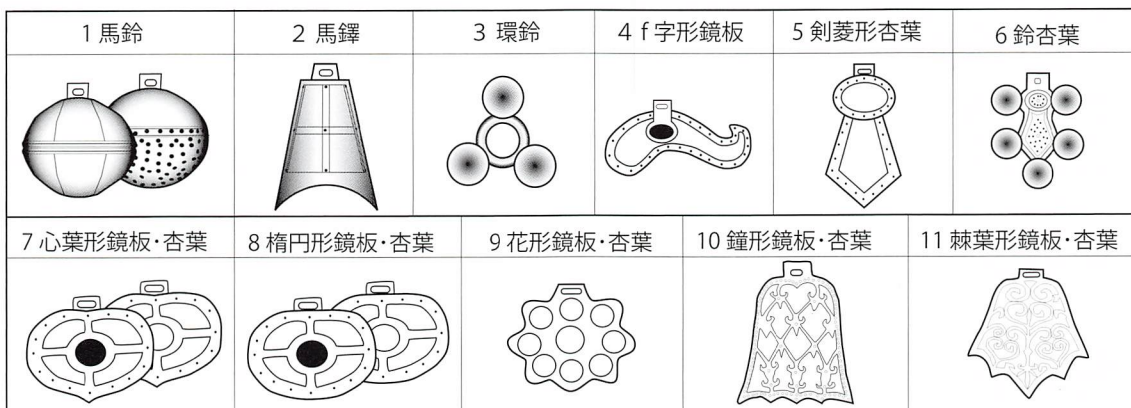
1 装飾馬具の種類

1 各 論

ここでは馬鈴や馬鐸・環鈴・鈴杏葉などの鑄造馬具の他、f字形・剣菱形・心葉形・楕円形・花形・鐘形・棘葉形の鏡板・杏葉などの金銅製の板物馬具を対象とし、その分類・展開・分布などの概要を記す。

(1) 馬 鈴

馬鈴は、最も普遍的な馬装の一つである。通常胸繫に複数装着される。鈴は、馬具以外に帯



第1図 装飾馬具

金具などに付けられるものもある。これらの識別は容易ではなく、以下の統計処理において両者が混在していることをお断りしておきたい⁽¹⁾。156古墳などで337個⁽²⁾が出土している。

a 分類

材質的には金製・銀製・銅製・鉄製があり、その多くは鋳造製である。銅製のなかには鍍金されたものもある。形態的には、球鈴が主流であるが角鈴の他に扁平鈴もある。また、片鈴口が突出した鱗付・花卉付の鈴も存在する。

b 展開

馬鈴は、5世紀後半に朝鮮半島から搬入され、同末以降は日本でも製作が開始される。

c 分布

群馬県、長野県伊那谷・福岡県北部・宮崎県に集中する傾向がある。



第2図 馬鈴

d まとめ

墳形で見ると円墳⁽³⁾が前方後円墳の出土例の約2倍を示す。また、横穴からの出土率も他の馬具に比較すると高くなっている。

一括出土数について記す。15個：静岡県賤機山古墳、12個：群馬県前山古墳・千葉県金鈴塚古墳・千葉县城山1号墳、6個：栃木県桑57号墳・群馬県小泉大塚越3号墳・静岡県宇洞ヶ谷横穴・島根県岡田山1号墳、5個：栃木県天王塚古墳・栃木県助戸十二天塚古墳・群馬県四ツ谷古墳・埼玉県広徳寺所在古墳・大阪府南塚古墳、4個：群馬県綿貫観音山古墳・埼玉県將軍山古墳、長野県飯沼雲彩寺古墳・和歌山県大谷古墳・島根県上塩冶築山古墳などがある。

| 内容 遺構 | 遺構数 | 割合 (%) | 点数 | 割合 (%) | 1遺構当たり出土数 | | | | | | | | | | | | 遺構数 |
|----------|-----|-----------|-----|-----------|-----------|-----|----|----|----|----|----|----|----|---|----|----|-----|
| | | | | | 1点 | % | 2点 | % | 3点 | % | 4点 | % | 5点 | % | 6点 | % | |
| 前方後円墳 | 40 | 26 | 113 | 34 | 23 | 58 | 2 | 5 | 4 | 10 | 4 | 10 | 2 | 5 | 5 | 13 | 40 |
| 円墳 | 83 | 53 | 137 | 41 | 64 | 77 | 8 | 10 | 5 | 6 | 1 | 1 | 3 | 4 | 2 | 2 | 83 |
| 横穴 | 12 | 8 | 17 | 5 | 11 | 92 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 8 | 12 |
| その他 | 1 | 1 | 1 | 0 | 1 | 100 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 不明 | 20 | 13 | 69 | 20 | 12 | 60 | 2 | 10 | 1 | 5 | 1 | 5 | 0 | 0 | 4 | 20 | 20 |
| 合計 | 156 | 100 | 337 | 100 | 111 | 71 | 12 | 8 | 10 | 6 | 6 | 4 | 5 | 3 | 12 | 8 | 156 |

○墳形不明は、円墳に含めた。○その他は土壙?である。

第1表 馬鈴

(2) 馬 鐸

a 分 類

馬鐸は、66遺跡146点が確認されている。

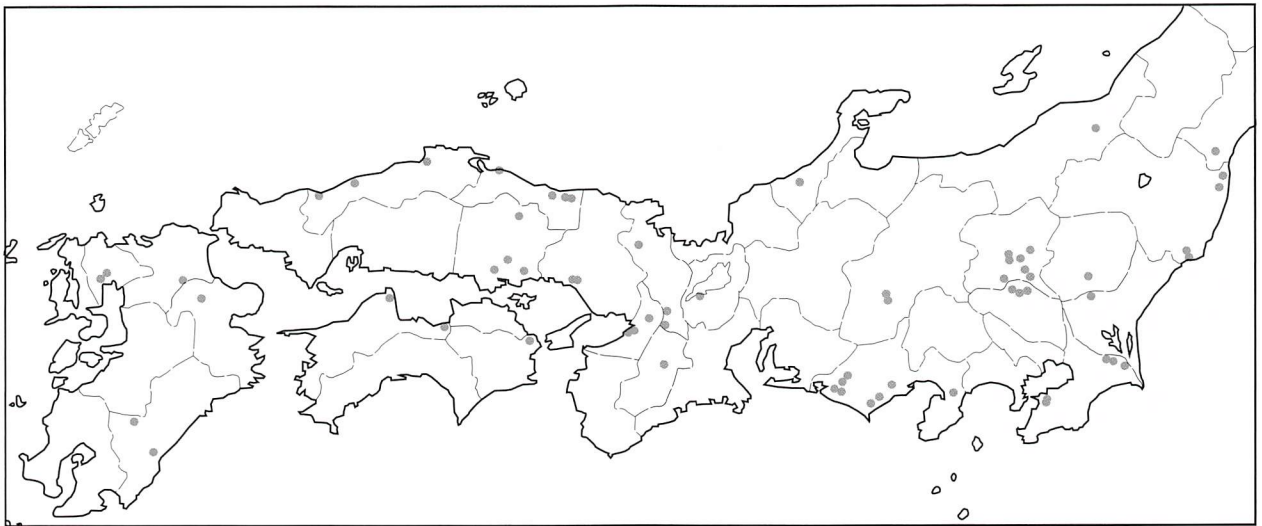
b 展 開

馬鐸は5世紀前半に出現するが、盛行するのは我が国独自の形態の成立する6世紀代になってからである。7世紀初頭まで存続する。

c 分 布

5世紀代では、宮城県から宮崎県までの広範な地域に散発的に分布し、それぞれの地域の代表的な初期古墳に副葬されている。副葬される馬鐸の数は、1～3点のものが多く、宝器的な意味合いが強い。6世紀前半になると若干分布範囲を狭めるが各地に散在し、特に集中する地域はみられない。各地域の代表的な前方後円墳の他に小規模な円墳にも副葬されるようになる。6世紀後半になると四国・九州には認められず、分布範囲を更に狭める。しかし千葉県北部や長野・静岡県などの特定の地域に集中する傾向が認められる。

全般的には埼玉県北部から群馬県にかけての地域に集中し、東京湾東岸(木更津市周辺)、千葉県北部(佐原市周辺)、福島県浜通りに分布する。



第3図 馬鐸

d ま と め

馬鐸出土の前方後円墳は各地域の代表的なものであるが、円墳は特に際立った規模を有していない。一括出土点数で見ると、1点は出土数不明なものを1点と数値化したために31件(45%)でありその割合が極めて多いが、馬形埴輪の馬装から類推すると胸繫には3～4個、尻繫には2～4個が装着されている。なお2点は14古墳、3点は15古墳である。初期の馬鐸は鈴と共伴する例が多く、胸繫に鈴、尻繫に馬鐸を装着することを基本にしていた可能性がある。

| 内容 遺構 | 遺構数 | 割合 (%) | 点数 | 割合 (%) | 1遺構当たり出土数 | | | | | | | | | | | | 遺構数 |
|----------|-----|-----------|-----|-----------|-----------|----|----|----|----|----|----|----|----|---|-----|---|-----|
| | | | | | 1点 | % | 2点 | % | 3点 | % | 4点 | % | 5点 | % | 6点< | % | |
| 前方後円墳 | 14 | 20 | 39 | 27 | 4 | 29 | 2 | 14 | 4 | 29 | 2 | 14 | 1 | 7 | 1 | 7 | 14 |
| 円墳 | 34 | 49 | 75 | 52 | 13 | 38 | 6 | 18 | 11 | 32 | 3 | 9 | 1 | 3 | 0 | 0 | 34 |
| 横穴 | 4 | 6 | 6 | 4 | 2 | 50 | 2 | 50 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| その他 | 4 | 6 | 5 | 3 | 3 | 75 | 1 | 25 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| 不明 | 13 | 19 | 20 | 14 | 9 | 69 | 3 | 23 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 8 | 0 | 0 | 13 |
| 合計 | 69 | 100 | 145 | 100 | 31 | 45 | 14 | 20 | 15 | 22 | 5 | 7 | 3 | 4 | 1 | 1 | 69 |

○不明は、円墳に含めた。○その他は方墳2、住居跡2である。

第2表 馬鐸

(3) 環 鈴

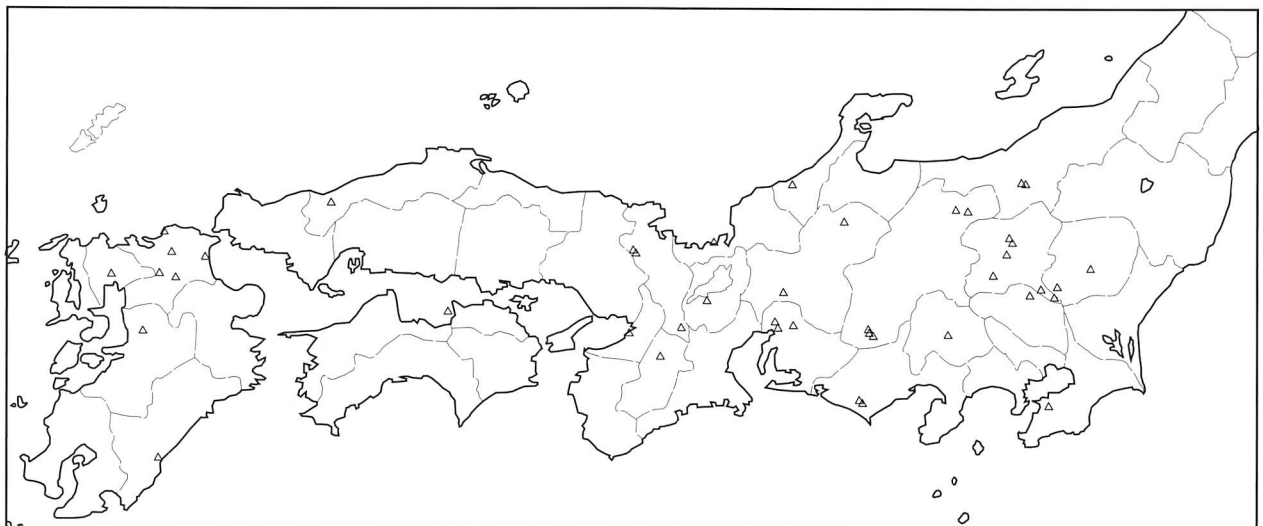
45古墳などで61点が確認されている。

a 分 類

三環鈴が基本であるが、二環鈴(千葉県矢那大原古墳)と四環鈴(福岡県小田茶臼塚古墳)が1例ずつ存在する。

b 内 容

1古墳から出土数は、1点が大多数を占めるが複数出土する例も存在する。例示すると3点が茨城県上野古墳・長野県竹原笹塚古墳など、2点が千葉県矢那大原古墳である。



第4図 環鈴

c 展 開

5世紀前半に出現し、6世紀前半には終焉を迎える。主に5世紀代に盛行する馬具である。

d 分 布

新潟県から宮崎県までの範囲で散在的に出土している。しかし島根県めんぐる古墳を除くと中国・四国の出土例は無い。なお、有銘鉄剣(刀)を出土した埼玉県稻荷山古墳と熊本県江田船山古墳の両者から出土した点は特筆される。

e ま と め

環鈴が馬具であるかは検討を要する。桐原健は、「環鈴は馬鈴として胸繫などに垂下されたものかとも考えられるが、金鎧山古墳以外は金銅製馬具が伴っていないことから馬装の一つでは

ない」とし、更に「大阪府南天平古墳での棺内の腰のあたりに副葬されていたと云うから、鈴鏡の様に平常は巫女の腰につけられていたのかもしれない」(桐原1974)としている。いっぽう関義則は「(環鈴に)馬具が伴っていないことだけを理由に馬具以外の用途を推測することの危険性」を指摘した上で、出土状態などから「中・大型の環鈴は、ほぼ手綱に通されていたとみて疑いないであろう」(関1998)としている。

| 内容 遺構 | 遺構数 | 割合 (%) | 点数 | 割合 (%) | 1遺構当たり出土数 | | | | | | | | | | | | 遺構数 |
|----------|-----|-----------|----|-----------|-----------|-----|----|---|----|---|----|---|----|---|----|----|-----|
| | | | | | 1点 | % | 2点 | % | 3点 | % | 4点 | % | 5点 | % | 6点 | % | |
| 前方後円墳 | 15 | 33 | 17 | 28 | 14 | 93 | 0 | 0 | 1 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 15 |
| 円墳 | 26 | 58 | 32 | 52 | 22 | 85 | 2 | 8 | 2 | 8 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 26 | |
| 横穴 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| その他 | 2 | 4 | 2 | 3 | 2 | 100 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | |
| 不明 | 2 | 4 | 10 | 16 | 2 | 100 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | |
| 合計 | 45 | 100 | 61 | 100 | 40 | 89 | 2 | 4 | 3 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 45 | |

○不明は、円墳に含めた。○その他は、方墳・土壇各1である。

第3表 環鈴

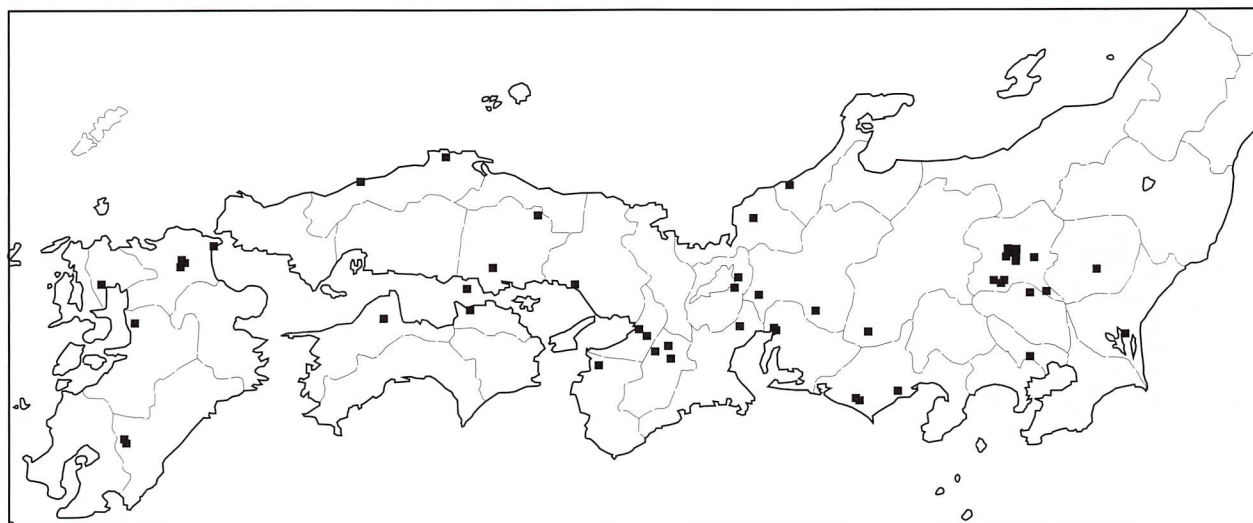
(4) f字形鏡板

52古墳などで103点が確認されている。

a 分類

和歌山県大谷古墳例に見るように当初は、両端とも尾(末端)が跳ね上がるが、やがて頭部(前方部)が丸く表現され典型的なf字形鏡板が出現する。また、山口県上ノ山古墳・和歌山県大谷古墳例などのように鈴付のものや福岡県寿命王塚古墳例のような鱗付のものも存在する。熊本県江田船山古墳例は、尾の両端が同方向に配された特異な型である。本例は、一般的に加飾されたものが多いが、群馬県白石二子山古墳例は細板状で紋様の見られないシンプルなものも存在する。群馬県上滝古墳例は唯一の杏葉である。形態は、白石二子山古墳例と類似する。

なお、新しくなるにつれてf字の屈曲が弱くなり大形化するとともに縁金を取り付ける銚の数が増加する。また、引手が鏡板の内側で連結するようになる。これは鏡板の装飾性を損なわないような工夫の表れである。



第5図 f字形鏡板

b 展開

5世紀中葉から7世紀初頭まで存続する。

c 分布

栃木県から宮崎県にかけての範囲で検出されている。5世紀代では大阪府の1点の他、栃木・群馬・長野の東国で各1点ずつ出土している。6世紀代は、全国に散在する傾向にある。

d まとめ

53古墳などで70点以上が出土している(うち3件・4点は出土地不明)。墳形の判明している古墳の割合で見ると前方後円墳18基・円墳26基・方墳2基・横穴2基の計48基である。剣菱形杏葉との共伴例は、19古墳であり約40%を占めるに過ぎない。両者の組成を否定するものではないが、剣菱形杏葉を共伴しない古墳も相当する存在するのは事実である。

なお出土点数は、対で使用される事から2個の検出例が多い。

| 内容 遺構 | 遺構数 | 割合 (%) | 点数 | 割合 (%) | 1遺構当たり出土数 | | | | | | | | | | | | 遺構数 | |
|----------|-----|-----------|-----|-----------|-----------|----|----|-----|----|---|----|---|----|---|-----|---|-----|----|
| | | | | | 1点 | % | 2点 | % | 3点 | % | 4点 | % | 5点 | % | 6点< | % | | |
| 前方後円墳 | 18 | 34 | 35 | 34 | 1 | 6 | 17 | 94 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 18 |
| 円墳 | 26 | 49 | 52 | 50 | 2 | 8 | 23 | 88 | 0 | 0 | 1 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 26 |
| 横穴 | 2 | 4 | 4 | 4 | 0 | 0 | 2 | 100 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| その他 | 3 | 6 | 6 | 6 | 0 | 0 | 3 | 100 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| 不明 | 4 | 8 | 6 | 6 | 2 | 50 | 2 | 50 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| 合計 | 53 | 100 | 103 | 100 | 5 | 9 | 47 | 89 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 53 |

○不明は、円墳に含めた。○出土点数が不明なものについては、2点として数えた。○その他は、方墳2・土墳1である。

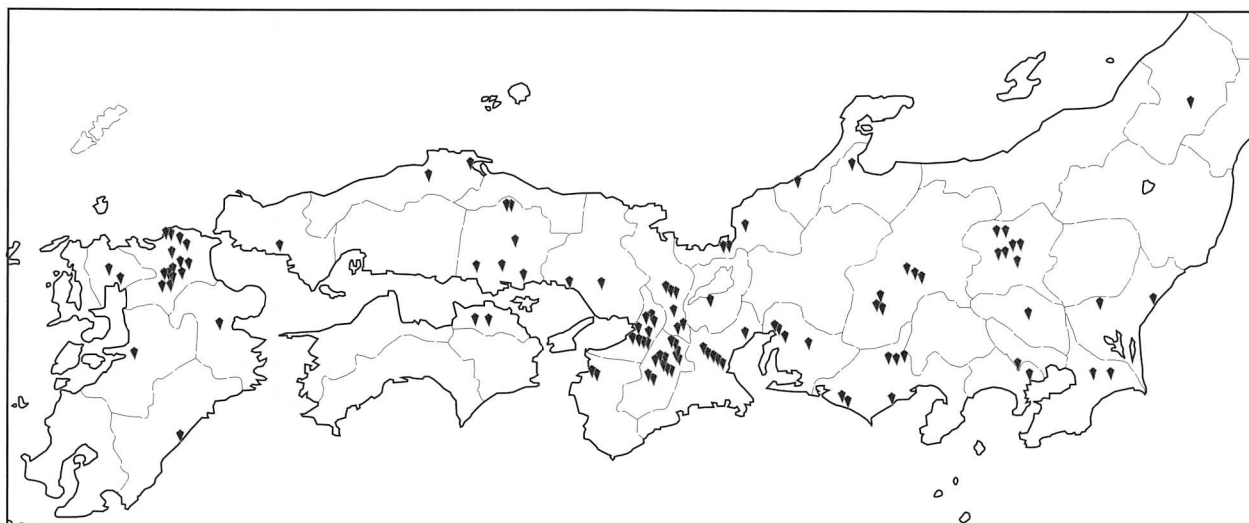
第4表 f字形鏡板

(5) 剣菱形杏葉

102遺跡、178点が存在する。

a 分類

楕円形、或いは心葉形に剣菱形を組み合わせた2系統の形態が主流である。しかし、岡山県西郷面古墳や群馬県前二子古墳・同恵下古墳例のような変形型も存在する。また、和歌山県大谷古墳出土例は別作りの鈴7個、大阪府愛宕塚古墳では鱗を周囲に付している。



第6図 剣菱形杏葉

b 展開

5世紀代では舶載品が多くを占めるが、同後半からは国内でも生産が開始されるようになる。新しくなるにつれて剣菱先端の尖りが強くなる・縁金具を留める鉾が密になる・飾り板を付したものが出現するなど装飾性が豊かになる。

c 分布

群馬・近畿圏・岡山・福岡で集中的に分布している。

d まとめ

102件の古墳の内訳は、前方後円墳39基・円墳55基・方墳1基である。出土数についても、前方後円墳と円墳の割合は近似している。1遺構あたりの出土数は、3点が47%でありほぼ半数を占め、次いで2点が22%となる。

なお、本例と組成となると言われているf字形鏡板を共伴する古墳は13古墳を数える。しかし剣菱形杏葉出土古墳は約97基存在するので、その共伴率は13%に過ぎない。これから見る限り、厳密な組成関係にはないことが伺われる⁽⁴⁾。

| 内容 遺構 | 遺構数 | 割合 (%) | 点数 | 割合 (%) | 1遺構あたり出土数 | | | | | | | | | | | | 遺構数 |
|----------|-----|-----------|-----|-----------|-----------|----|----|-----|----|----|----|---|----|----|-----|----|-----|
| | | | | | 1点 | % | 2点 | % | 3点 | % | 4点 | % | 5点 | % | 6点< | % | |
| 前方後円墳 | 39 | 38 | 84 | 47 | 0 | 0 | 6 | 32 | 8 | 42 | 1 | 5 | 2 | 11 | 2 | 11 | 19 |
| 円墳 | 55 | 54 | 85 | 48 | 3 | 19 | 1 | 6 | 9 | 56 | 1 | 6 | 2 | 13 | 0 | 0 | 16 |
| 横穴 | 2 | 2 | 3 | 2 | 0 | 0 | 1 | 100 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| その他 | 2 | 2 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 不明 | 4 | 4 | 4 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 合計 | 102 | 100 | 178 | 100 | 3 | 8 | 8 | 22 | 17 | 47 | 2 | 6 | 4 | 11 | 2 | 6 | 36 |

○不明は、円墳に含めた。○出土点数を特定できないものについては1点として数えた。○その他は、方墳・土壇各1である。

第5表 剣菱形杏葉

(6) 鈴杏葉

89古墳などから150点が確認されている。これには、出土地不明な資料43件55点が含まれている。

a 分類

鈴杏葉は、剣菱形杏葉に3ないし5個の鈴を付与したものである。初期には二鈴杏葉も存在



第7図 鈴杏葉

したようである。鈴数は三鈴杏葉が26点、五鈴杏葉が11点であり前者が圧倒的に多い。

b 展開

5世紀後半に出現し、6世紀後半には消滅する。剣菱形杏葉に5個の鈴を付したものが祖型となろうが、直ぐに3鈴のものが出現した。五鈴杏葉に比して三鈴杏葉が遅くまで存続した。

c 分布

福島県から佐賀県までに存在しているが、関東北部および東海に比較的集中して分布している。畿内を含め西日本では、極めて希薄な分布となっているのが特徴である。

d まとめ

鈴杏葉については、永沼律朗の「鈴杏葉考」(永沼1983)と斉藤弘の「鈴杏葉の分類と編年について」(斉藤1984)に詳しい。両者は主に形態や珠文の数やその配される位置に注目して編年を組み立てているが、結果として両者の編年観は整合していない。変遷の概要は、新しくなるにつれて(1)下半部が長くなる。(2)珠文の数が増加する。(3)鈴にも文様が付される。これが認められるとするならば、永沼案が有利と思われる。

鈴杏葉、特に五鈴杏葉が鈴付の剣菱形杏葉を祖型としたことは十分に考えられる。鈴杏葉の大多数を占める三鈴杏葉がその影響を強く受けていることは間違いないであろうが、鑄造馬具という視点で捉えれば、三環鈴を強く意識したものと思われる。三環鈴が馬具として装着されるとき、装着を容易にするために立聞を追加したものであり、用途を代替しているものと考えられる。

鈴杏葉は福島県いわき市から佐賀県武雄市の範囲に認められる。しかし、均一に認められる訳ではなく、茨木・栃木・群馬の北関東と長野南部・静岡西部・愛知の中部高地から東海にかけて濃密に分布している。1遺跡から出土する数は1～5個であり、鈴の数は大多数が3個である。なお、1古墳から出土する鈴杏葉には、同范のものがある(さきたま稲荷山古墳3例のうち2例)。

| 内容 遺構 | 遺構数 | 割合 (%) | 点数 | 割合 (%) | 1遺構当たり出土数 | | | | | | | | | | | | 遺構数 | |
|----------|-----|-----------|-----|-----------|-----------|----|----|----|----|----|----|---|----|---|-----|---|-----|----|
| | | | | | 1点 | % | 2点 | % | 3点 | % | 4点 | % | 5点 | % | 6点< | % | | |
| 前方後円墳 | 16 | 18 | 32 | 21 | 3 | 25 | 2 | 17 | 7 | 58 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 12 |
| 円墳 | 27 | 30 | 58 | 39 | 7 | 30 | 3 | 13 | 12 | 52 | 0 | 0 | 1 | 4 | 0 | 0 | 23 | |
| 横穴 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| その他 | 2 | 2 | 4 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 不明 | 43 | 48 | 55 | 37 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 合計 | 89 | 100 | 150 | 100 | 10 | 29 | 5 | 14 | 19 | 54 | 0 | 0 | 1 | 3 | 0 | 0 | 35 | |

○不明は、円墳に含めた。○出土数を特定できないものについては1点として数えた。○1遺構あたりの出土数は点数が確定しているのみの数である。○その他は、方墳と土壘各1である。

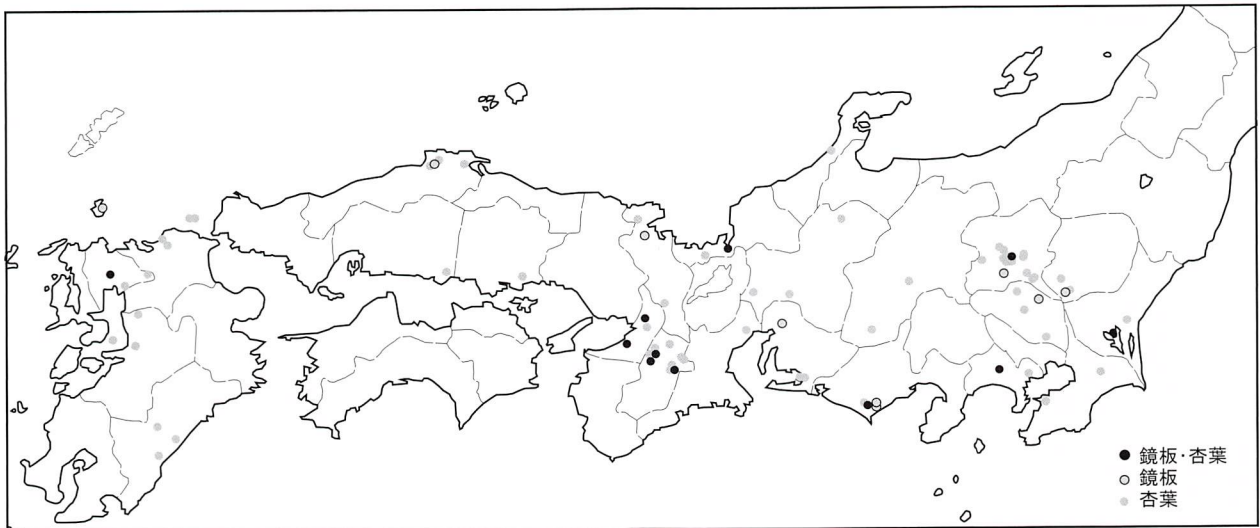
第6表 鈴杏葉

(7) 心葉形鏡板・杏葉

93古墳などで鏡板28点・杏葉157点の計185点が確認されている。

a 分類

ハート形とも言われている。十字文・三葉文・忍冬文などの模様が表現され、それぞれ系譜を異にしている。また、終末期には仏像の光背と同様な意匠を施したものもある。



第8図 心葉形鏡板・杏葉

b 展開

5世紀代では小形の鉄板製のものがある。6世紀代では意匠も多様で華やかになり、盛行する。7世紀前半まで存続する(植田1999)。

c 分布

茨城県から宮崎県までの範囲で分布する。北関東・畿内に集中し、九州には散在する傾向がある。

d まとめ

93古墳などで185点が確認されているが鏡板のみを出土した古墳は11基(14%)、杏葉のみを出土した古墳69基(86%)であり、後者が前者の量を凌駕している。

資料数で見ても鏡板28点(15%)、杏葉157点(85%)であり、遺構数の比率と一致する。また鏡板と杏葉の両者を出土した古墳が13基であるが、全体の14%に留まっている。

心葉形杏葉については、岡安光彦の「心葉形鏡板付轡・杏葉の編年」(岡安1988)がある。

(8) 楕円形鏡板・杏葉

89古墳などで鏡板75点と杏葉104点の計179点が確認されている。

a 分類

板物の十字文・三葉文・忍冬文・放射文などが基本であるが愛知県志段味大塚古墳出土例のような鈴付鑄造製のものもある。福岡県樫山古墳例は底辺が内湾し、他は波状を呈している。引手は鏡板の内側で連結する。

b 展開

6世紀前半から7世紀初頭まで存続するが、内湾形は5世紀前半から6世紀後半まで存続する(植田1999)。

| 遺構 | 種類 | 遺構数 | 計 | 割合% | 点数 | % | 合計 | % |
|-------|-----|-----|----|-----|-----|----|-----|-----|
| 前方後円墳 | 鏡板 | 2 | 29 | 31 | 9 | 5 | 62 | 34 |
| | 杏葉 | 22 | | | 53 | 29 | | |
| | 鏡・杏 | 5 | | | — | — | | |
| 円墳 | 鏡板 | 8 | 51 | 55 | 17 | 9 | 107 | 58 |
| | 杏葉 | 36 | | | 90 | 49 | | |
| | 鏡・杏 | 7 | | | — | — | | |
| 横穴 | 鏡板 | 0 | 3 | 3 | 1 | 1 | 6 | 3 |
| | 杏葉 | 2 | | | 5 | 3 | | |
| | 鏡・杏 | 1 | | | — | — | | |
| その他 | 鏡板 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 杏葉 | 0 | | | 0 | 0 | | |
| | 鏡・杏 | 0 | | | — | — | | |
| 不明 | 鏡板 | 1 | 10 | 11 | 1 | 1 | 10 | 5 |
| | 杏葉 | 9 | | | 9 | 5 | | |
| | 鏡・杏 | 0 | | | — | — | | |
| 合計 | 鏡板 | 11 | 93 | 100 | 28 | 15 | 185 | 100 |
| | 杏葉 | 69 | | | 157 | 85 | | |
| | 鏡・杏 | 13 | | | — | — | | |

○不明は、円墳に含めた。

第7表 心葉形鏡板・杏葉

資料数で見ても鏡板28点(15%)、杏葉157点(85%)であり、遺構数の比率と一致する。また鏡板と杏葉の両者を出土した古墳が13基であるが、全体の14%に留まっている。

心葉形杏葉については、岡安光彦の「心葉形鏡板付轡・杏葉の編年」(岡安1988)がある。

(8) 楕円形鏡板・杏葉

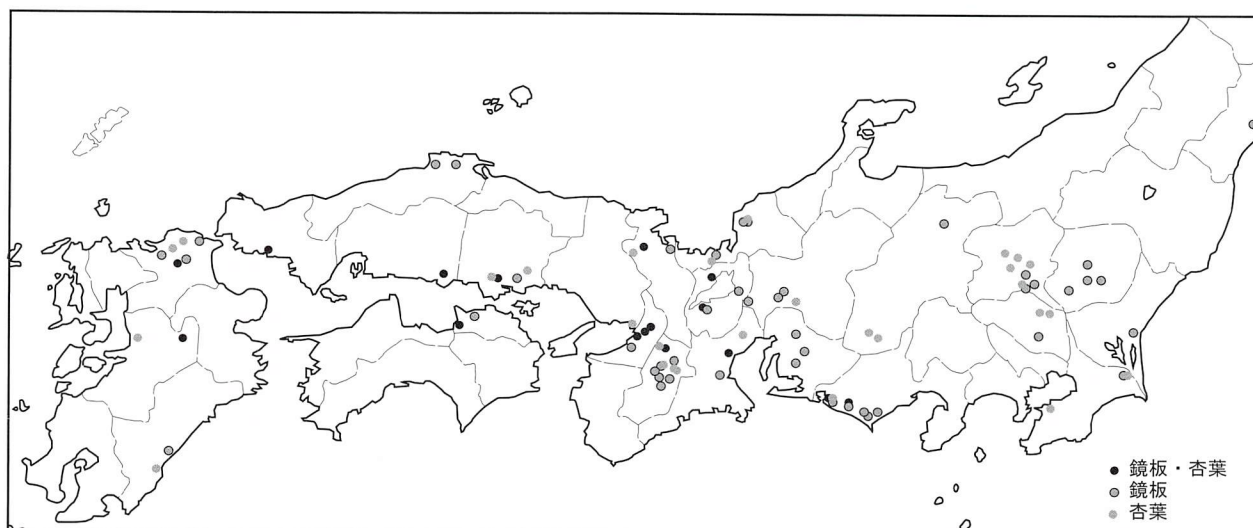
89古墳などで鏡板75点と杏葉104点の計179点が確認されている。

a 分類

板物の十字文・三葉文・忍冬文・放射文などが基本であるが愛知県志段味大塚古墳出土例のような鈴付鑄造製のものもある。福岡県樫山古墳例は底辺が内湾し、他は波状を呈している。引手は鏡板の内側で連結する。

b 展開

6世紀前半から7世紀初頭まで存続するが、内湾形は5世紀前半から6世紀後半まで存続する(植田1999)。



第9図 楕円形鏡板・杏葉

c 分布

宮城から宮崎までの範囲に認められるが、栃木・群馬、静岡西部・中部・奈良・福岡に集中している傾向がある。このうち特に鏡板は、栃木・静岡・岐阜・滋賀・島根に多く認められるのに対し、杏葉は群馬に集中している。

d まとめ

89古墳などで179点が確認されている。この内、鏡板のみを出土した古墳は43基(61%)、杏葉のみを出土した古墳27基(39%)である。資料数から見ると鏡板75点(42%)、杏葉104点(58%)であり、遺構数と資料数の比率は反比例する。つまり遺構数では「鏡板のみ」、資料数では「杏葉のみ」を出土した数が多いのである。また鏡板と杏葉の両者を出土した古墳が19基であるが、全体の21%に留まっている。

ここでは、「一夜塚古墳出土馬具の検討」(石田2011)において石田大輔が十字文楕円形鏡板と杏葉の組み合わせなどについて検討している。これによれば、26点の十字文楕円鏡板が紹介されている。これらは、全国に散在しているが静岡・大阪に比較的集中している。組み合わせとなる杏葉は、楕円形16点(三葉文14点・忍冬楕円文2点)、心葉形6点(三葉文5点・忍冬文1点)、剣菱形1点、鈴杏葉2点、棘葉形1点である。定説とおり三葉文楕円形杏葉との組成が大きな比率を占めるが、他の組み合わせも多い。つまり、同型の鏡板と杏葉の組成に強い拘りが存在しないような状況が見て取れる。

(9) 花形鏡板・杏葉

21古墳など鏡板7点と杏葉44点の計51点が確認されている。

| 遺構 | 種類 | 遺構数 | 計 | 割合% | 点数 | % | 合計 | % |
|-------|----|-----|----|-----|-----|----|-----|-----|
| 前方後円墳 | 鏡板 | 12 | 28 | 31 | 23 | 13 | 74 | 41 |
| | 杏葉 | 8 | | | 51 | 28 | | |
| 円墳 | 鏡板 | 8 | 49 | 55 | — | — | 88 | 49 |
| | 鏡板 | 28 | | | 47 | 26 | | |
| | 杏葉 | 11 | | | 41 | 23 | | |
| 横穴 | 鏡板 | 10 | 0 | 0 | — | — | 0 | 0 |
| | 鏡板 | 0 | | | 0 | 0 | | |
| | 杏葉 | 0 | | | 0 | 0 | | |
| その他 | 鏡板 | 0 | 4 | 4 | — | — | 9 | 5 |
| | 鏡板 | 1 | | | 3 | 4 | | |
| | 杏葉 | 2 | | | 6 | 6 | | |
| 不明 | 鏡板 | 1 | 8 | 9 | — | — | 8 | 4 |
| | 鏡板 | 2 | | | 2 | 1 | | |
| | 杏葉 | 6 | | | 6 | 3 | | |
| 合計 | 鏡板 | 0 | 89 | 100 | — | — | 179 | 100 |
| | 鏡板 | 43 | | | 75 | 42 | | |
| | 杏葉 | 27 | | | 104 | 58 | | |
| | 鏡板 | 19 | — | — | — | — | — | |

○不明は、円墳に含めた。○その他は、方墳2・祭祀遺跡1・土壌1である。

第8表 楕円形鏡板・杏葉



第10図 花形鏡板・杏葉

a 分類

時期が新しくなるにつれて花びらやその内面に表現される丸形の数が増えて大形化するものとその数が少なくなって簡略化するものの二者に分かれる(岡本1997)。

b 展開

6世紀後半に出現し、7世紀前半まで存続する。

c 分布

群馬には集中しているが、他地域では極めて稀少である。中国・四国では検出例が確認できない。

d まとめ

21古墳などで確認されているが、鏡板と杏葉が共伴しているのは3基に限られる。出土点数で見ると鏡板7点と杏葉44点の計51点が確認されている。後者が圧倒的に多いのは、1頭の馬装に必要な鏡板が2点(1対)であるのに対し、杏葉は胸繫と尻繫で恐らく7・8点を必要としたためであろう。

(10) 鐘形鏡板・杏葉

29古墳などで鏡板9点と杏葉71点の計80点が確認されている。

a 分類

当初は忍冬文(パルメット文)が斜格子状に組み合わせられるが、終末期には前者が省略される。典型的な鐘形は下端を四波で表現しているが、千葉県江子田金冠塚古墳例のように二波のものがある。本例は、馬鐸の平物的な馬具である。なお、棘葉形との区別が不明瞭なものがある。

b 展開

6世紀中葉から7世紀前半まで展開する。

| 遺構 | 種類 | 遺構数 | 計 | 割合% | 点数 | % | 合計 | % |
|-------|-----|-----|----|-----|----|----|----|-----|
| 前方後円墳 | 鏡板 | 1 | 9 | 43 | 4 | 8 | 26 | 51 |
| | 杏葉 | 6 | | | 22 | 43 | | |
| | 鏡・杏 | 2 | | | — | — | | |
| 円墳 | 鏡板 | 2 | 10 | 48 | 3 | 6 | 22 | 43 |
| | 杏葉 | 7 | | | 19 | 37 | | |
| | 鏡・杏 | 1 | | | — | — | | |
| 横穴 | 鏡板 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 杏葉 | 0 | | | 0 | 0 | | |
| | 鏡・杏 | 0 | | | — | — | | |
| その他 | 鏡板 | 0 | 1 | 5 | 0 | 0 | 1 | 2 |
| | 杏葉 | 1 | | | 1 | 2 | | |
| | 鏡・杏 | 0 | | | — | — | | |
| 不明 | 鏡板 | 0 | 1 | 5 | 0 | 0 | 2 | 4 |
| | 杏葉 | 1 | | | 2 | 4 | | |
| | 鏡・杏 | 0 | | | — | — | | |
| 合計 | 鏡板 | 3 | 21 | 100 | 7 | 14 | 51 | 100 |
| | 杏葉 | 15 | | | 44 | 86 | | |
| | 鏡・杏 | 3 | | | — | — | | |

○墳形不明は、円墳に含めた。

第9表 花形鏡板・杏葉



第11図 鐘形鏡板・杏葉

c 分布

北関東や畿内で集中する傾向があるが、全体としては散在している。

d まとめ

29古墳などで確認されているが、このうち鏡板と杏葉を共伴したのは5基に留まる。出土点数でみると鏡板9点と杏葉71点の計80点が確認されているが、後者が圧倒的に多い。その理由は前述したとおり1馬装において鏡板より杏葉の方が必要個数が多い為である。

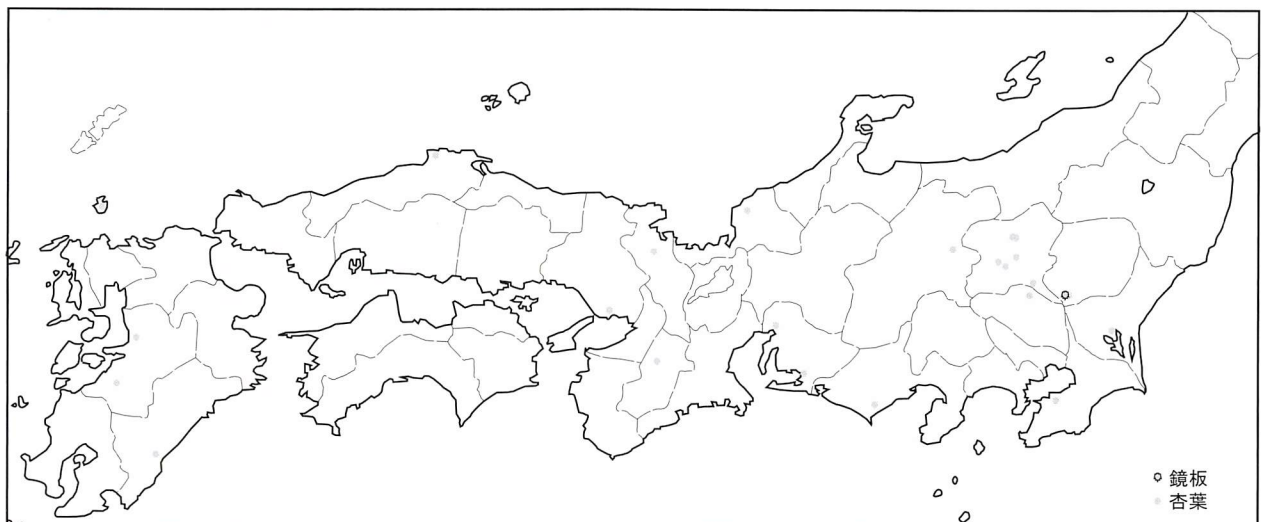
(1) 棘葉形鏡板・杏葉

29古墳などで鏡板1点と杏葉80点の計81点が確認されている。

| 遺構 | 種類 | 遺構数 | 計 | 割合% | 点数 | % | 合計 | % |
|-------|-----|-----|----|-----|----|----|----|-----|
| 前方後円墳 | 鏡板 | 0 | 6 | 21 | 3 | 4 | 21 | 26 |
| | 杏葉 | 4 | | | 18 | 23 | | |
| | 鏡・杏 | 2 | | | — | — | | |
| 円墳 | 鏡板 | 2 | 16 | 55 | 4 | 5 | 46 | 58 |
| | 杏葉 | 12 | | | 42 | 53 | | |
| | 鏡・杏 | 2 | | | — | — | | |
| 横穴 | 鏡板 | 1 | 2 | 7 | 1 | 1 | 3 | 4 |
| | 杏葉 | 0 | | | 2 | 3 | | |
| | 鏡・杏 | 1 | | | — | — | | |
| その他 | 鏡板 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 杏葉 | 0 | | | 0 | 0 | | |
| | 鏡・杏 | 0 | | | — | — | | |
| 不明 | 鏡板 | 1 | 5 | 17 | 1 | 1 | 10 | 13 |
| | 杏葉 | 4 | | | 9 | 11 | | |
| | 鏡・杏 | 0 | | | — | — | | |
| 合計 | 鏡板 | 4 | 29 | 100 | 9 | 11 | 80 | 100 |
| | 杏葉 | 20 | | | 71 | 89 | | |
| | 鏡・杏 | 5 | | | — | — | | |

○不明は、円墳に含めた。

第10表 鐘形鏡板・杏葉



第12図 棘葉形鏡板・杏葉

a 分類

忍冬文を主なモチーフとするがその形態は極めて多様である。鐘形との分類が明確ではない。

b 展開

6世紀中葉から7世紀前半まで展開する。

c 分布

北関東に集中する傾向がある。中国・四国及び北部九州では確認されていない。比較的馬具出土例の多い長野や静岡での検出例が少ないのが特徴であろうか。

d まとめ

29古墳などで確認されているが、この

うち鏡板と杏葉を共伴したのは1基のみである。出土点数で見ると鏡板1点と杏葉80点の計81点が確認されているが、後者が圧倒的に多い。その理由は前述したとおりであるが、それ以外にも鏡板の装飾が胸繫・尻繫のそれよりも早く廃れた為だと思われる。

| 墳形 | 種類 | 遺構数 | 計 | 割合% | 点数 | % | 合計 | % |
|-------|-----|-----|----|-----|----|----|----|-----|
| 前方後円墳 | 鏡板 | 0 | 7 | 24 | 1 | 1 | 23 | 28 |
| | 杏葉 | 6 | | | 22 | 27 | | |
| | 鏡・杏 | 1 | | | — | — | | |
| 円墳 | 鏡板 | 0 | 16 | 55 | 0 | 0 | 47 | 58 |
| | 杏葉 | 16 | | | 47 | 58 | | |
| | 鏡・杏 | 0 | | | — | — | | |
| 横穴 | 鏡板 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 杏葉 | 0 | | | 0 | 0 | | |
| | 鏡・杏 | 0 | | | — | — | | |
| その他 | 鏡板 | 0 | 2 | 7 | 0 | 0 | 7 | 9 |
| | 杏葉 | 2 | | | 7 | 9 | | |
| | 鏡・杏 | 0 | | | — | — | | |
| 不明 | 鏡板 | 0 | 4 | 14 | 0 | 0 | 4 | 5 |
| | 杏葉 | 4 | | | 4 | 5 | | |
| | 鏡・杏 | 0 | | | — | — | | |
| 合計 | 鏡板 | 0 | 29 | 100 | 1 | 1 | 81 | 100 |
| | 杏葉 | 28 | | | 80 | 99 | | |
| | 鏡・杏 | 1 | | | — | — | | |

○墳形不明は、円墳に含めた。

第11表 棘葉形鏡板・杏葉

2 まとめ

(1) 遺構別各種装飾馬具の出土割合(第12・13表)

第12表は、遺構別各種装飾馬具の出土割合を示したものである。装飾馬具は、伝世品が多く出土地を特定できないものが多い。特にその数が顕著なのが鈴杏葉の55点であり全体の37%を占める。馬鐸の20点も比較的多く14%を占める。第13表は第12表の「横穴・その他・不明」を削除して、前方後円墳と円墳だけの割合を示したものである。これによれば各装飾馬具の出土割合は、前方後円墳が27%~47%、円墳が53%~73%の範囲に収まる。平均すると前者が36%、後者が64%であり各種装飾馬具全体の出土割合は、前方後円墳が円墳の1/3程度である。これは前方後円墳と円墳の総数の差に起因するが、それでも円墳が前方後円墳の約2倍の装飾馬具を出土する事実は注目しておいて良いように思われる。

特に前方後円墳からの出土率が低い、換言すれば円墳からの出土率が高いのは馬鐸と鐘形・棘葉形である。馬鐸は、出土遺構不明の資料が多いのが影響していることも考えられるが、より多くの出土遺構不明の鈴杏葉が相応の割合を示していることを考えると理解できない。馬鐸は、どちらかと言うと円墳に多く副葬された遺物と言う事になるのであろうか。それに対し鐘形と棘葉形は、前方後円墳の築造がピークを過ぎた後に展開した資料の故の現象なのであろう。

何れにしろ、前方後円墳と円墳によって各種装飾馬具がそれぞれ副葬される割合に変化が見られるようなデータは得られない。

(2) 各種馬具と出土古墳の規模(第13図・第14表)

各装飾馬具が出土する前方後円墳の最小は17m~45m(平均28m)・最大が95m~120m(平均105m)、円墳の最小は8m~17m(平均12m)・最大が35m~84m(平均57m)である。

| 遺構 | 種類 | 遺構数 | 割合% | 点数 | 割合% |
|-------------------------------|---------------|-----|-----|-------|-----|
| 前方後円墳 | (1) 馬鈴 | 40 | 26 | 113 | 34 |
| | (2) 馬鐸 | 14 | 20 | 39 | 27 |
| | (3) 環鈴 | 15 | 33 | 17 | 28 |
| | (4) f字形鏡板 | 18 | 35 | 35 | 34 |
| | (5) 剣菱形杏葉 | 39 | 38 | 84 | 47 |
| | (6) 鈴杏葉 | 16 | 18 | 32 | 21 |
| | (7) 心葉形鏡板・杏葉 | 29 | 31 | 62 | 34 |
| | (8) 楕円形鏡板・杏葉 | 28 | 31 | 74 | 41 |
| | (9) 花形鏡板・杏葉 | 9 | 43 | 26 | 51 |
| | (10) 鐘形鏡板・杏葉 | 7 | 24 | 23 | 28 |
| | (11) 棘葉形鏡板・杏葉 | 6 | 21 | 21 | 26 |
| | 小計 | 221 | 29 | 526 | 34 |
| 円墳 | (1) 馬鈴 | 83 | 53 | 137 | 41 |
| | (2) 馬鐸 | 34 | 49 | 75 | 52 |
| | (3) 環鈴 | 26 | 58 | 32 | 52 |
| | (4) f字形鏡板 | 26 | 50 | 52 | 50 |
| | (5) 剣菱形杏葉 | 55 | 54 | 85 | 48 |
| | (6) 鈴杏葉 | 27 | 30 | 58 | 39 |
| | (7) 心葉形鏡板・杏葉 | 51 | 55 | 107 | 58 |
| | (8) 楕円形鏡板・杏葉 | 49 | 55 | 88 | 49 |
| | (9) 花形鏡板・杏葉 | 10 | 48 | 22 | 43 |
| | (10) 鐘形鏡板・杏葉 | 16 | 55 | 47 | 58 |
| | (11) 棘葉形鏡板・杏葉 | 16 | 55 | 46 | 58 |
| | 小計 | 393 | 51 | 749 | 48 |
| 横穴 | (1) 馬鈴 | 12 | 8 | 17 | 5 |
| | (2) 馬鐸 | 4 | 6 | 6 | 4 |
| | (3) 環鈴 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | (4) f字形鏡板 | 2 | 4 | 4 | 4 |
| | (5) 剣菱形杏葉 | 2 | 2 | 3 | 2 |
| | (6) 鈴杏葉 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| | (7) 心葉形鏡板・杏葉 | 3 | 3 | 6 | 3 |
| | (8) 楕円形鏡板・杏葉 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | (9) 花形鏡板・杏葉 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | (10) 鐘形鏡板・杏葉 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | (11) 棘葉形鏡板・杏葉 | 2 | 7 | 3 | 4 |
| | 小計 | 26 | 3 | 40 | 3 |
| その他 (土壙・方墳・祭祀 遺跡・住居跡など) | (1) 馬鈴 | 1 | 1 | 1 | 0 |
| | (2) 馬鐸 | 4 | 6 | 5 | 3 |
| | (3) 環鈴 | 2 | 4 | 2 | 3 |
| | (4) f字形鏡板 | 3 | 6 | 6 | 6 |
| | (5) 剣菱形杏葉 | 2 | 2 | 2 | 1 |
| | (6) 鈴杏葉 | 2 | 2 | 4 | 3 |
| | (7) 心葉形鏡板・杏葉 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | (8) 楕円形鏡板・杏葉 | 4 | 4 | 9 | 5 |
| | (9) 花形鏡板・杏葉 | 1 | 5 | 1 | 2 |
| | (10) 鐘形鏡板・杏葉 | 2 | 7 | 7 | 9 |
| | (11) 棘葉形鏡板・杏葉 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 小計 | 21 | 3 | 37 | 2 |
| 不明 | (1) 馬鈴 | 20 | 13 | 69 | 20 |
| | (2) 馬鐸 | 13 | 19 | 20 | 14 |
| | (3) 環鈴 | 2 | 4 | 10 | 16 |
| | (4) f字形鏡板 | 3 | 6 | 6 | 6 |
| | (5) 剣菱形杏葉 | 4 | 4 | 4 | 2 |
| | (6) 鈴杏葉 | 43 | 48 | 55 | 37 |
| | (7) 心葉形鏡板・杏葉 | 10 | 11 | 10 | 5 |
| | (8) 楕円形鏡板・杏葉 | 8 | 9 | 8 | 4 |
| | (9) 花形鏡板・杏葉 | 1 | 5 | 2 | 4 |
| | (10) 鐘形鏡板・杏葉 | 4 | 14 | 4 | 5 |
| | (11) 棘葉形鏡板・杏葉 | 5 | 17 | 10 | 13 |
| | 小計 | 113 | 15 | 198 | 13 |
| 合計 | (1) 馬鈴 | 156 | 100 | 337 | 100 |
| | (2) 馬鐸 | 69 | 100 | 145 | 100 |
| | (3) 環鈴 | 45 | 100 | 61 | 100 |
| | (4) f字形鏡板 | 52 | 100 | 103 | 100 |
| | (5) 剣菱形杏葉 | 102 | 100 | 178 | 100 |
| | (6) 鈴杏葉 | 89 | 100 | 150 | 100 |
| | (7) 心葉形鏡板・杏葉 | 93 | 100 | 185 | 100 |
| | (8) 楕円形鏡板・杏葉 | 89 | 100 | 179 | 100 |
| | (9) 花形鏡板・杏葉 | 21 | 100 | 51 | 100 |
| | (10) 鐘形鏡板・杏葉 | 29 | 100 | 81 | 100 |
| | (11) 棘葉形鏡板・杏葉 | 29 | 100 | 80 | 100 |
| | 合計 | 774 | 100 | 1,550 | 100 |

第12表 遺構別出土装飾馬具の割合

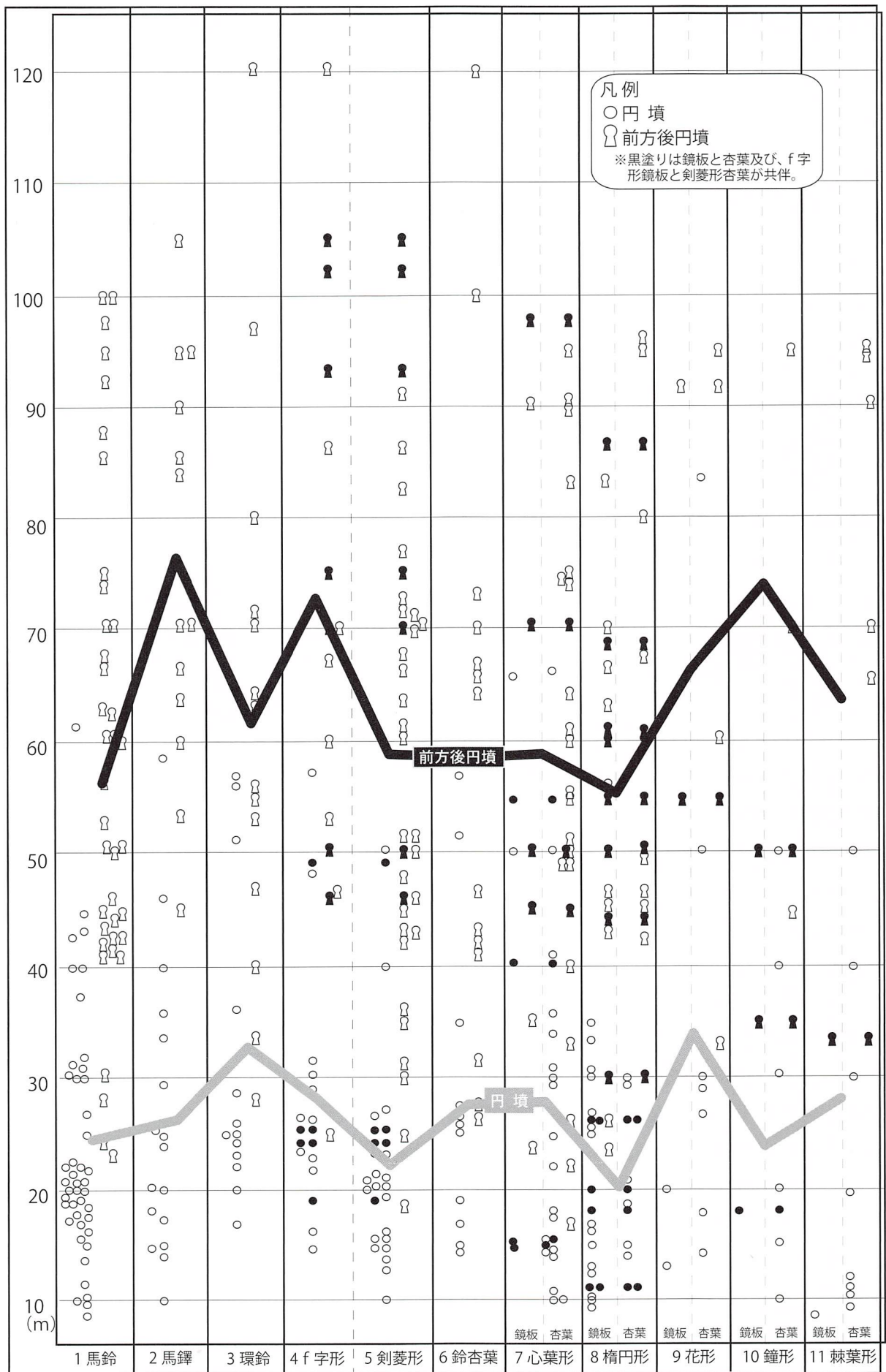
| 遺構 | 種類 | 遺構数 | 割合% | 点数 | 割合% |
|-------|---------------|-----|-----|-------|-----|
| 前方後円墳 | (1) 馬鈴 | 40 | 33 | 113 | 45 |
| | (2) 馬鐸 | 14 | 29 | 39 | 34 |
| | (3) 環鈴 | 15 | 37 | 17 | 35 |
| | (4) f字形鏡板 | 18 | 41 | 35 | 40 |
| | (5) 剣菱形杏葉 | 39 | 41 | 84 | 50 |
| | (6) 鈴杏葉 | 16 | 37 | 32 | 36 |
| | (7) 心葉形鏡板・杏葉 | 29 | 36 | 62 | 37 |
| | (8) 楕円形鏡板・杏葉 | 28 | 36 | 74 | 46 |
| | (9) 花形鏡板・杏葉 | 9 | 47 | 26 | 54 |
| | (10) 鐘形鏡板・杏葉 | 7 | 30 | 23 | 33 |
| | (11) 棘葉形鏡板・杏葉 | 6 | 27 | 21 | 31 |
| | 小計 | 221 | 36 | 526 | 41 |
| 円墳 | (1) 馬鈴 | 83 | 67 | 137 | 55 |
| | (2) 馬鐸 | 34 | 71 | 75 | 66 |
| | (3) 環鈴 | 26 | 63 | 32 | 65 |
| | (4) f字形鏡板 | 26 | 59 | 52 | 60 |
| | (5) 剣菱形杏葉 | 55 | 59 | 85 | 50 |
| | (6) 鈴杏葉 | 27 | 63 | 58 | 64 |
| | (7) 心葉形鏡板・杏葉 | 51 | 64 | 107 | 63 |
| | (8) 楕円形鏡板・杏葉 | 49 | 64 | 88 | 54 |
| | (9) 花形鏡板・杏葉 | 10 | 53 | 22 | 46 |
| | (10) 鐘形鏡板・杏葉 | 16 | 70 | 47 | 67 |
| | (11) 棘葉形鏡板・杏葉 | 16 | 73 | 46 | 69 |
| | 小計 | 393 | 64 | 749 | 59 |
| 合計 | (1) 馬鈴 | 123 | 100 | 250 | 100 |
| | (2) 馬鐸 | 48 | 100 | 114 | 100 |
| | (3) 環鈴 | 41 | 100 | 49 | 100 |
| | (4) f字形鏡板 | 44 | 100 | 87 | 100 |
| | (5) 剣菱形杏葉 | 94 | 100 | 169 | 100 |
| | (6) 鈴杏葉 | 43 | 100 | 90 | 100 |
| | (7) 心葉形鏡板・杏葉 | 80 | 100 | 169 | 100 |
| | (8) 楕円形鏡板・杏葉 | 77 | 100 | 162 | 100 |
| | (9) 花形鏡板・杏葉 | 19 | 100 | 48 | 100 |
| | (10) 鐘形鏡板・杏葉 | 23 | 100 | 70 | 100 |
| | (11) 棘葉形鏡板・杏葉 | 22 | 100 | 67 | 100 |
| | 合計 | 614 | 100 | 1,275 | 100 |

第13表 前方後円墳と円墳における出土装飾馬具の割合

前方後円墳の最小のなかで特に小規模なのは心葉形杏葉を出土した17mの岐阜県昼前車塚古墳と剣菱形杏葉を出土した18mの大阪府軽里4号墳である。最大なのは、馬鐸を出土した45mの京都府物集女車塚古墳であり、他の装飾馬具を出土した最大前方後円墳の規模を圧倒している。

円墳の最小のなかで特に小規模なのは、10mにも満たないものもある。最大なのは、花形杏葉を出土した84mの栃木県愛宕塚古墳である。しかし本古墳と2番目に大きい栃木県飯塚2号墳(51m)は共に帆立貝式であり、平均墳長を押し上げている。

各種装飾馬具を出土した前方後円墳の平均で見ると馬鐸・f字形鏡板・鐘形が70m以上であり、円墳では環鈴・花形が30m以上であり、それぞれ共に他の馬具に比較して大規模な古墳で出土している。いっぽう剣菱形杏葉



第13図 各種馬具と出土古墳の規模 ※折線は各裝飾馬具を出土した古墳の平均規模である。

を出土した大阪府軽里4号墳や心葉形杏葉を出土した岐阜県昼前車塚古墳は墳長20mに満たない小規模前方後円墳である。また円墳に関しては10m程度の小墳から馬鐸・心葉形杏葉・楕円形杏葉・鐘形杏葉・棘葉形杏葉などが出土している。以上のことから墳形・規模に「ランク付け」があったとは思われない。

| 各種馬具 | 墳形 | 最 小 | | 最 大 | | 平均 墳長(m) |
|---------------|-------|-------|-------------|-------|-------------|-------------|
| | | 墳長(m) | 古墳名 | 墳長(m) | 古墳名 | |
| (1) 馬鈴 | 前方後円墳 | 21 | 福島県高松山古墳 | 100 | 千葉県金鈴塚古墳 | 57 |
| | 円墳 | 9 | 群馬県坂古墳 | 61 | 群馬県雷電神社古墳 | 24 |
| (2) 馬鐸 | 前方後円墳 | 45 | 京都府物集女車塚古墳 | 105 | 群馬県保渡田薬師塚古墳 | 76 |
| | 円墳 | 10 | 福島県小池原8号墳 | 58 | 長野県塚原6号墳 | 26 |
| (3) 環鈴 | 前方後円墳 | 28 | 福岡県森原1号墳 | 120 | 埼玉県稲荷山古墳 | 60 |
| | 円墳 | 17 | 長野県金鏡山古墳 | 57 | 栃木県雀宮牛塚古墳 | 33 |
| (4) f字形鏡板 | 前方後円墳 | 25 | 大阪府七ノ坪古墳 | 120 | 埼玉県稲荷山古墳 | 72 |
| | 円墳 | 15 | 島根県上島古墳 | 57 | 栃木県雀宮牛塚古墳 | 28 |
| (5) 剣菱形杏葉 | 前方後円墳 | 18 | 大阪府軽里4号墳 | 105 | 群馬県保渡田薬師塚古墳 | 59 |
| | 円墳 | 10 | 福岡県浦谷c-6号墳 | 50 | 福井県円山塚古墳 | 23 |
| (6) 鈴杏葉 | 前方後円墳 | 26 | 群馬県洞山古墳 | 120 | 埼玉県稲荷山古墳 | 58 |
| | 円墳 | 15 | 石川県滝4号墳 | 57 | 栃木県雀宮牛塚古墳 | 27 |
| (7) 心葉形鏡板・杏葉 | 前方後円墳 | 17 | 岐阜県昼前車塚古墳 | 97 | 群馬県綿貫観音山古墳 | 59 |
| | 円墳 | 10 | 京都府西外古墳 | 66 | 長崎県笹塚古墳 | 27 |
| (8) 楕円形鏡板・杏葉 | 前方後円墳 | 24 | 島根県岡田山1号墳 | 95 | 千葉県金鈴塚古墳 | 55 |
| | 円墳 | 10 | 岐阜県熊田山北4号墳 | 35 | 愛知県岡崎市内2号墳 | 20 |
| (9) 花形鏡板・杏葉 | 前方後円墳 | 33 | 群馬県五代大日塚古墳 | 95 | 千葉県金鈴塚古墳 | 67 |
| | 円墳 | 14 | 群馬県松林山台14号墳 | 84 | 栃木県愛宕塚古墳 | 34 |
| (10) 鐘形鏡板・杏葉 | 前方後円墳 | 35 | 奈良県三里古墳 | 95 | 千葉県金鈴塚古墳 | 64 |
| | 円墳 | 10 | 京都府西外古墳 | 50 | 福井県丸山塚古墳 | 28 |
| (11) 棘葉形鏡板・杏葉 | 前方後円墳 | 34 | 栃木県足利公園3号墳 | 99 | 千葉県金鈴塚古墳 | 75 |
| | 円墳 | 8 | 群馬県池田村史2号墳 | 50 | 福井県円山塚古墳 | 23 |
| 平 均 | 前方後円墳 | 28 | | 105 | | 64 |
| | 円墳 | 12 | | 57 | | 27 |

第14表 装飾馬具と古墳の種類と規模

2 装飾馬具の様相

(1) 装飾馬具の製作地

装飾馬具は多様性を極めている。つまり、強い規格性を認めることができないことから排他的で一元的な工房の存在を想定しがたい。

それでも、原材料の入手・技術に裏打ちされた華麗さからその製作地は畿内と考えるのが合理的である。しかし実用馬具についての見解であるが松尾充晶は「今日では舶載品と国産品とといった大別2系列論では理解尽くせないことが自明である。例えば舶載される馬具は朝鮮半島の政治的変動を反映して故知が変化していくし、その半島内での地域性ですら排他的な独立性をもつわけではなく複雑な要素錯綜がみられる。かたや列島内で製作された馬具であっても、渡来系技術者による直接製作品、その技術系譜による二次製作品、さらに技術継承のない列島内既成技術での模倣品、列島内で創出された国産品、と様々なケースが想定される。もちろん列島内の技術系統も一つではない」(松尾2005)と言う。

また大刀を分析した滝瀬芳之は、飾大刀の製作地・製作集団は「そのすべてが畿内に存在したとは判断しにくい。需要の拡大にともない、地方に拠点を設けたと考えたい」(滝瀬1984)とした。また甲冑についても「畿内で集中的に生産した品が配布されたのか、ヤマト王権のコントロールのもとに各地の生産が展開したかのどちらかであろう」(文献失念)とその製作地の可能性を広い範囲で捉える考えも存在する。仮に倭王権の管理下に生産されていたとしても、その規制は決して強固なものではないと言えそうである。

(2) 馬具と馬形埴輪の関係

以前、馬鐸と馬鐸装埴輪との関連を検討したことがあった。しかし両者の有機的な関連は、極めて希薄であるとの結論に至った。つまり馬鐸を副葬している古墳に造立されている馬形埴輪に馬鐸が表現されていないのである。その逆の例も多数存在した。このことから埴輪工人は、依頼主から「飾り馬を2体・馬子2体・農夫1体云々」程度の発注を受けて生産していたものと思われる。つまり馬装などの細部にまで指示を受けていた様子は見られない。工人が「飾り馬」を製作しようとして胸繫に「馬鐸」をとイメージすれば、馬鐸装埴輪が製作されたのである。更に云えば馬形埴輪に表現された馬鐸は、その殆どが忠実に表現されてはいない。工人は馬鐸を実見していないのである。

装飾馬具が威信財としての役割を有するのであれば、馬形埴輪に表現された馬装と出土馬具の不一致は何を意味するのであろうか。もし、その馬鐸が威信財として権威の象徴に成り得たのであれば埴輪にそれを表示し、誇示したのではないだろうか。しかしそのような事実はない。つまり、被葬者は自らの墓(寿陵)に樹立される埴輪のディテールに頓着しなかったのである。つまり埴輪を通して見るかぎり装飾馬具に威信財としての役割は、感じられないのである。

しかし、埴輪は単に概念化されたものかと言うと、そうでもなく忠実に再現されたと考えられる例も存在する。例えば群馬県成塚石橋2号墳出土の馬形埴輪の鏡板は星形で細部まで精緻に表現されおり、あたかも実物を模したように見受けられる。実際に同様な鏡板は確認されていないが、福岡県壱山古墳の彎曲のある楕円形鏡板が比較的類似している。また、群馬県諏訪下30号墳の馬形埴輪は方形鏡板を表現しているが、同白石二子山古墳ではこの稀少な方形鏡板が出土している。更に、蛇行状鉄器を表現した馬形埴輪を出土した埼玉県酒巻14号墳例も挙げることができる。本古墳に蛇行状鉄器が副葬されているのかは不明であるが、その寡少性を勘案すると存在しない可能性が高い。しかしこの馬形埴輪に表現された蛇行状鉄器は、鞍への取り付けなどが的確に表現されており、埴輪製作工人がこの馬装を実見した可能性は高い。当古墳から至近距離(約8km)にある埼玉將軍山古墳からは蛇行状鉄器が出土していることから、少なくとも酒巻14号墳主は、先の古墳主が蛇行状鉄器を設えた馬装を見知っていたのである。つまり、自らの儀式でそれを借用したり、あるいはそれを装着した將軍山古墳主の儀式に参列した事があったのかも知れない。只単に憧れの馬装を埴輪群に表現しただけかも知れない。何れにしても酒巻14号墳主は、蛇行状鉄器を表現した馬装に強い拘りがあったことがわかる。当古墳に樹立されていた盤領・筒袖を着た渡来人を模した埴輪の存在が気にかかる。彼が蛇行状鉄器の招来に関わっていたのであろうか。

また馬装に限らず、人物を忠実に表現したと思われる埴輪群像に千葉県姫塚古墳例がある。ここに表現された人物埴輪群は、細部を違えて表現されており個人を特定しているかのように見受けられる。

3 装飾馬具は威信財と成り得るか

倭王権は、大王を中心とした豪族連合である。大王は有力氏族によって擁立された。そして有力氏族は、畿内各地の氏族によって輪番されたと捉えられている。更に大王は諸国の豪族関係者を上番させ、支配組織を確立させ全国統一を図っていった。各地方豪族は、許可されて大

王と同じ前方後円形の墳墓を採用したと考えられていることから、支配関係を“前方後円墳体制”と呼んでいる。

(1) 下賜と威信財

卑弥呼に銅鏡などを下賜した魏帝曹芳は「国中の人にしめせ」と指示した。卑弥呼もそれや何らかのものを同様な意図で地方の首長に下賜したのであろうか。だとすれば卑弥呼は地方の首長に魏帝、地方の首長は在地民に卑弥呼が後見人として存在することを顕示し、自らの政治活動を優位に行うのに有用な道具として下賜品を利用したことになる。つまりこの場合、下賜品は威信財となったことになる。

「威信」とは、「畏敬の念を起こさせる徳の力を信じて任せること」つまり「威厳があって忠実なこと」(上田1993)である。つまりそのものが共同幻想によってそのように感じられるのであれば、それは何でも良いのである。つまり下賜品でも能動的に入手したものであればそれが特異なものであれば威信の効果は期待できるのである。「俺は金製の馬具を持っている。すごいだろう」と見せびらかせ、「あの人は何て素晴らしい物を持っているのだろう」と感嘆し、その人を羨望すればそれは威信のアイテムになろう。しかし、本稿では「威信財」を次のように狭義に定義する。「威信財とは大王ないし畿内豪族から下賜されたが故に、被下賜者はそれを在地での政治活動において実用的で有意なものとする」。「政治活動」や「実用的」についても定義する必要があるが、ここでは問わないことにする。つまりあるモノが威信財となるには、それが下賜品であることが条件であり、そのモノの背景に上位の支配者の存在を感じさせるものでなければならない。単に、それが稀少・貴重な物であるだけならばそれは「威儀具」とし、便宜的に「威信財」とは区別しておきたい。もし鏡の分有が下賜によるものだとすればそれは威信財となるが、だとすれば古墳時代の当初より相応の関係が存在したことになる。

(2) 装飾馬具は下賜品か

馬具生産工人を管掌していたのは畿内豪族だと仮定しているが、4世紀代の初期倭王権を支えていたのは大伴・物部・葛城の各氏である。このうち大伴・物部氏は6世紀まで権勢を誇っていたが、葛城氏は5世紀中頃には衰退した。この頃、平群氏は台頭したが5世紀末には衰退する。また巨勢氏は、その後台頭し6世紀初頭に活躍する。新興蘇我氏は、6世紀代に活躍した。このような状況と各馬具の変遷から該当する氏族と馬具の関連を想定しても彼らの本願地に特定の馬具の分布は見られない⁽⁵⁾。

ところで装飾馬具に限らず古墳に副葬されるような優品が下賜品であり、威信財であるという代表的な説を紹介しておこう。威信財のなかでも特に冠・帯金具・履などの服飾、挂甲など武具や馬具など貴重な文物は、倭王権から下賜されたものであるとの見解が存在する。石山勲は「(九州出土の環鈴に限れば、渡海軍の一隊を率いる将に対して)中央政権から、その地位の証・象徴として与えたものと推定したい」(石山1980)とし、永沼律朗は「東国に分布する鈴杏葉や鏡板は、東国首長が若き日に王宮におもむき奉仕した際に賜わったもの」と考えている(永沼1983)。また、坂本美夫は「f字形鏡板付轡+剣菱形杏葉は、ヤマト政権の支配圏の伸長が地域勢力との同盟、抗争を経て確立された状況を裏付けたもので、権力側から従属勢力への馬具の供与が確認される威信財中の威信財である」と考えている(坂本1996)。また冠帽を検討した高橋直美は、「有力首長たちが力量を示すための威信財」(高橋1995)とした。また、桐原健は鳴り物

の鑄造馬具の地方への流通を次のように考えている。「国造の子女であり巫女である采女が宮廷の神及び天子に奉仕をする。そして任期満了後帰国するに際してはそれぞれの国で宮廷の神を祀る事を強請され、その神を祀る採物を与えられた。それが鈴鏡であり鈴釧であり環鈴の類である」(桐原1974)とした。これも下賜説の一種であろうか。

一方、非下賜・非威信財説も存在する。威信財であるとするれば最も価値の高いと考えられる渡来文物について小林行雄は「異国の器物は異国の文化との結びつきにおいて憧憬の的となり、畿内の大王も地方の首長も、ともに協力してその確保に奔走した」(小林1962)とした。装身具について検討した安井良三も朝鮮半島の事例とは異なり日本ではセットとして存在しないことから、日本での装身具は、宝器的・記念品的なもの(安井1967)として威信財としての役割に否定的な考えを示した。更に高田貫太も垂飾付耳飾などの渡来文物の入手方法について「少なくとも倭王権が一元的に朝鮮半島系装身具を入手し、それを各地域社会に分与したとみる考古学的根拠は希薄である」とし、更に「各地域権力は多様かつ錯綜した交渉ルートを駆使してその受容に努めたはずである」(高田2006)としている。本説を容認する例として全国で2例しか発見されていない馬青や同10例程度の蛇行状鉄器などの稀少な渡来系文物がある。これらは畿内中枢からの出土例はないことから、倭王権からの下賜とは考えられない。在地首長による独自のルートによって入手したことを推定させる⁽⁶⁾。

(3) 装飾馬具は下賜品ではない

ここで装飾馬具が下賜されたものではないこと、つまり威信財とは成り難い可能性を指摘しておく。

①同種の鏡板と杏葉が共伴しない例が多い。以下、共伴割合を提示するとf字形鏡板と剣菱形杏葉が40%、心葉形の鏡板と杏葉が14%、楕円形のそれが21%を示すに過ぎない。共伴例は、極めて低いのである。もし下賜品であるならば、セットで下賜するのが原則ではないだろうか。製作者は、組成を意識したことは間違いないであろう。参考までに馬鐸と共伴した例を提示すると以下ようになる。馬鐸と組成となる馬具は、生産時期の異なる花形・鐘形・棘葉形を除くと何でも良かったのであり、厳密な組成関係は認められない。

| 遺構 | 1 鈴 | 2 馬鐸 | 3 環鈴 | 4 f字 | 5 剣菱 | 6 鈴杏 | 7 心葉 | 8 楕円 | 9 花形 | 10 鐘 | 11 棘葉 | 合計 |
|-------|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|----|
| 前方後円墳 | 2 | / | 3 | 2 | 4 | 1 | 1 | 3 | 1 | 0 | 0 | 17 |
| 円墳 | 5 | / | 3 | 2 | 2 | 4 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 17 |
| 他 | 0 | / | 1 | 1 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 |
| 合計 | 7 | / | 7 | 5 | 6 | 6 | 4 | 3 | 1 | 0 | 0 | 39 |

第15表 馬鐸と共伴した馬具

②「前方後円墳体制」の秩序に基づいて古墳が存在するのであれば、円墳より前方後円墳主、小古墳より大古墳主により優品が下賜されると思われるが、必ずしもそのような出土状態は認められない⁽⁷⁾。

③各装飾馬具の分布は偏向・粗密の地域差はそれぞれ存在するが、大局的には全国に散在する。それでもこれは各地にそれぞれの製作地があると捉えるよりも、その多くは畿内にあると捉えるのが合理的であろうか。それを各地の豪族が畿内に参内する機会を得て入手したものと考えたい。但し、装飾馬具の種類はそれぞれ多様性を究め、官営工房で排他的に一括管理・集中生産をしているようには感じられない。

④副葬された馬具とそこに樹立された馬形埴輪の馬装が一致しない場合が多い。装飾馬具が

下賜品・威信財であるならば、馬形埴輪にもその馬装を表現しその事実を顕彰するものと思われるがそのような事象は希薄である。つまり仮に馬鐸を下賜されていないとしても馬鐸装馬形埴輪を樹立しているような状況も想定される。これについても何らお咎めはないのである⁸⁾。

以上の事から装飾馬具は下賜品、つまり威信財であると言う見解には疑問を感じざるを得ない。むしろ、自らの顕彰を文字に刻んだ国宝金錯名鉄剣と同様に、装飾馬具などは何らかの機会を得て能動的に入手した可能性を指摘したい。つまり、これらの品々は思い出や自慢の品以上の物ではなかったが、稀少性故に結果的には威信の効果も期待できたであろう。

(4) 身分を表徴するもの

古墳時代前期、邪馬台国は必要に応じて諸国に「長官」などを置き行政に当たさせた。そして同後期には国造制が成立すると考えられる。大王は、諸国に国造を配することになるが、これらの官人には当国の最有力者が任命された。卑弥呼、あるいは大王は任命に際し、その証として何かを授与したのであろうか。恐らく、宣旨だけではないだろうか。もし仮に下賜品が存在したとすれば、卑弥呼は当時最も価値が高かった銅鏡を授与したことが考えられる。大王の時代には、神仙思想は下火となり必然的に銅鏡への憧憬も薄らぐが、何らかの下賜品は存在するものと思われる。その意図は、当時の支配形態が直接支配とは考えられないことから、有事の際の協力関係、消極的には非敵対関係を維持するための下賜に留まったものと思われる。

ところで甲斐貴光によれば「環頭大刀は、中国大陸の漢代に官人の身分を象徴するものとして発達してきた」(甲斐2011)と言う。また、新納 泉は「奈良時代や平安時代には天皇から将軍が『節刀』を授与されていた。節とは竹の節に由来する割符であり、中国では王が将軍に全権を委ねるシンボルのようなものであった。(改行) 古墳時代の支配者層は、『節』の原理をよく知っていたはずである。(中略) 古墳時代に刀と節が結びついていた確実な証拠はないが、権力を委ねるという意味で刀が用いられていたことは、十分に考えられる」(新納2011)と指摘している⁹⁾。また、瀧瀬芳之は、方頭大刀については古墳時代終末期に地方豪族が「官僚」として身分保証された証として授与されたものとして注目している(瀧瀬2102)。

(5) 副葬品の変遷と道教

死者に種々の品物が副葬されるのは、墓主が死後の世界においてそれを必要としたからである。副葬品、それは壺型を模した不老不死の世界で理想的な生活を営むための必需品であり、それは現世において墓主が最も大事にしていた品々であった¹⁰⁾。

始皇帝が不老不死の仙薬を求めて東海に浮かぶ神山に徐福を遣わせた時から暫く経った頃、北九州では甕棺墓が展開する。世界に類を見ない大きさを誇る甕棺は、亡骸をすっぽりと納めることができる。そして、後に我が国において三種の神器と称された鏡・剣・玉が副葬され、棺内には朱が撒かれた。これらの副葬品は、不老不死を実現するための神仙アイテムである。特に神仙曼陀羅を表現した鏡背の画像は、不老不死を実現するための重要なものであり、倭人垂涎の宝器であった。倭人は、これを求め甕棺に納めた。福岡県三雲南小路1号甕棺から35面、同須玖岡本甕棺から32面が出土しており、収集への狂信ぶりには驚かされる。更に甕棺には、天と地を結ぶ「生命の樹」を思わせる放射状文や家屋と推定される線刻が描かれることがある(大庭2011)。これも神仙思想の影響であろう。つまり壺の中には別世界が存在するという神仙

思想を倭的に具現化した甕棺の導入は、第1次道教的宗教改革であったのである⁽¹¹⁾。棺に「壺」を採択した段階である。

次いで古墳時代になると第2次道教的宗教改革が行われることになる。それを行ったのが卑弥呼であり、彼女は前方後円形の墓を最初に採用した人物でもある。世界の王墓が幾何学的な方形を呈することを考えると、この複雑な形態は何かを具象化したものと考えた方が理解し易い。道教世界において壺の中には現世とは別の理想的な世界(「壺中の天」)が存在したこと、不老不死の仙人が住む島が壺の形であったこと(蓬壺と呼ばれた)から、前方後円形はこの壺を模したものと理解している。墓所に「壺」型を採択した段階である。

卑弥呼の「鬼道」は、暗闇に包まれた死後の世界しか知らなかった倭人に不老不死の世界が存在することを説く新興宗教であった⁽¹²⁾。卑弥呼は宗教改革を行ったのである。瞬く間に全国に波及した前方後円墳は、この宗教観・世界観の普及を意味する。

ところで古墳への副葬品は、時期によって変化が見られる。前期古墳には弥生甕棺墓と同様な鏡を中心とした祭祀遺物が副葬され、墳丘には円筒埴輪や器台に載せた壺を模した朝顔型埴輪が樹立される。これは壺形の前方後円墳に埋葬され、神仙になるためのアイテム(銅鏡など)を所有していれば不老不死を実現できると観念されていた段階(第2 a 段階)である。その後、馬具⁽¹³⁾や武器・武具などの鉄製品が副葬され、新たに器材埴輪が樹立される。神仙世界での生活が具体的にイメージされはじめ、種々の資材も必要であると意識されてきた段階である(第2 b 段階)。そして最後には、現世での生活をそのまま神仙世界でも再現できるように意図するのである。現世と同様な生活財が副葬され、現世でも実際に行った夢のような理想的な場面を再現した人物や動物群などの埴輪群が樹立される。なかには古墳主さえも表現したのがあり、来世での生活を夢想する段階である(第2 c 段階)。神仙思想に伴う抽象的な他界観が具象(具体)化する経過が、副葬品の変遷の過程である。

つまり、第2 c 段階は、神仙思想における他界観念の一つの到達点である。副葬品は来世における生活の必需品であり、埴輪群像はあるべき生活場面(現世における理想、あるいはメモリアルな場面)を表現しているのである。神仙世界での生活を目途した埴輪群像は、観念化・固定化していったであろうが、基本的には墓主の要望により何をどのように配置されるかは個々に任されていたのである。それが埴輪群像である。始皇帝が地下王宮を設え、兵馬俑を構築したのと同様な意図によるものである。古墳時代を象徴する前方後円墳の形、副葬品、埴輪群像の意味は、一体化されたものであり統一的に捉えなければならない。

前方後円墳の諸事象を政治的な意味合いで理解しようとするのが一般的な見方である。そして、大きな成果を上げているのも事実であろう。しかし、前方後円墳は墓であり一次的には文化的な事象であり、政治的な産物のみではないことを意識しておかなければならない。「前方後円墳の時代」は理解できるが、「前方後円墳体制」は容認しがたい。

前方後円墳の終焉は、新たな他界観の出現を意味する。継体16年(522)、『扶桑略記』によると渡来系氏族が「草堂に仏像を安置・礼拝した」(廣岡2011)ことが知られている。仏教伝来である。道教アイテムの粹であった銅鏡にも古くより仏獣鏡⁽¹⁴⁾が存在した。そして奈良時代になると400年以上続いた古墳時代の事象や伝承を集成して神話などが編まれた。古墳時代は前方後円墳に象徴されるような道教思想に席卷され、それを倭的に取り入れた時代である。その時代を記

した神話は、道教の影響を色濃く残している。神話、つまり「神道」は道教と同化したために両者を区別することは容易でなくなってしまった。今日、道教が私達の意識から脱落してしまったのは、神道に取って代わってしまったからなのである。

おわりに

本稿を草するにあたり利根川章彦・関義則の両氏には基礎的な知識から細部に至るまで様々なご教示を頂いた。しかし、それに応える能力も気力もないのは、何とも申し訳ない。また下記の方々にもご協力・ご教示を賜った。20数年前にお世話になった方は、その事実をお忘れの事と存じます。当時のご厚意に対し、ご芳名を掲示させて頂き謝意を表することができ安堵している。改めて、厚くお礼申し上げます。

畏友新屋雅明氏が逝去された。病床に原稿を持ち込んで苦闘した氏の生き様をしっかりと胸に刻みたい。愛娘を遺して逝った氏を思うと胸が苦しい。

伊賀高弘・泉 武・大谷 徹・久保哲正・佐藤晃一・末木啓介・外尾常人・滝瀬芳之
中村杏葉・日栄智子・福田 昭・藤田三郎・水谷壽克・山内紀嗣・Nгуêñ Dĩa Đôí

《註》

- (1) 径1cm以下の小鈴は、馬鈴からは除外した。
- (2) 馬鈴に限らず鏡板を除いた馬具出土の遺跡数や個数の集成は、複数の文献から一覧表を作成して基礎資料とした。遺跡数には、収集者数(遺跡名不明)もそれに加えて数値化している。また個数については、その数を記していない場合は「1個」と換算して数値化した(他の馬具についても同様)。よって実際の出土は、相当数増加するものと思われる。
- (3) 帆立貝式古墳は、「円墳」に含めた。また墳形不明なもの多くは、円墳の可能性が高いものと考え「円墳」とした。以下同様である。
- (4) f字形鏡板と剣菱形杏葉は、その故地である加耶でも共伴しない例が多数存在する。
- (5) 畿内有力氏族と馬具との関わりについて、積極的に論じているのが桃崎祐輔氏である(氏の文献を入手できなかったため、これを紹介した松尾充晶「技術論からみた馬具研究史」[(松尾2005)]を参考に引用する)。以下、改変して孫引きしたために、誤謬の恐れがあることをお断りしておきたい。

○5世紀代：斉一性と規格化(大王権のもとで一元的に近い生産体制) ○6世紀代：多様化と新形式の創出(政権中枢の有力主要豪族[大伴・物部・蘇我・紀・巨勢])が個別の交渉ルートや工人編成を背景に生産。更にそれを関係の深い地方首長や傘下集団に贈与。大形f字は大伴氏主導、鐘形の国産化・花形の出現は物部氏主導) ○6世紀末～7世紀前葉：製作技法の斉一化(馬具生産は、親蘇我勢力に統合)であるとしている。

- (6) ここで埼玉古墳群を具体例にして記しておきたい。舶載品と考えられる馬冑と蛇行状鉄器を出土した唯一の古墳が埼玉將軍山古墳である。この古墳から僅か7km離れた場所に酒巻14号墳があり、本古墳からは半島系の筒袖衣を着た人物埴輪と蛇行状鉄器装着の馬形埴輪が出土している。この筒袖衣の人物は渡来人である。古墳主、或いは渡来人が將軍山古墳出土渡来品の将来に何らかの関わりをもったものと思われる。

ところで蛇行状鉄器を装着した馬形埴輪が出土した酒巻14号墳主は、それを所有していたのであろうか。儀式などにおいて馬装を整えるために將軍山古墳主から借用して挙行したことは考えられる。しかし、その真偽はどちらでも良い。ただ他界で理想的な生活するために、理想的な馬装を表現した馬形埴輪を必要としたのであろう。馬鐸に限らず実際の馬具より、それを表現した馬形埴輪が多いのはそのためである。

なお埼玉古墳群の始祖墳稲荷山古墳主の関係者を葬った礫床木棺墓から舶載品の帯金具や鉾が出土している。礫床墓主乎獲居は「武」の遣仕、或いは杖刀人首として大陸・半島に出仕したことがあったのであろうか。当古墳群は、成立の初期より半島との関わりを強く感じさせる。また酒巻古墳群周辺のとやま古墳(斎条古墳群)や大稲荷古墳群は埼玉稲荷山古墳に先行、つまりその故地になる可能性がある。

- (7) 装飾馬具などの優品が墳形や規模とは整合性が無いような状態で副葬されている事について関義則氏に次のようなご教示を得た。氏によれば「大王の元に上番する地方豪族の「格」が違うからである。つまり上番者達は、その報償として等しく同様な馬具などが授与される訳であるが、彼らは死後「格」に応じた墳形と規模の古墳を築造し、授与品が副葬されるためではないだろうか」と言う。
- (8) 墓主が樹立したかたのは馬そのものであり、馬装にはこだわる必要もない程、些末な問題であったのである。
- (9) 現在では、両刃を剣、片刃を刀と称して区別している。古墳時代には、8振(6振は刀・2振は剣)の銘文刀剣がある。しかし「剣」と記した例はなく、判読できる6振は全て「刀」と表しているが、国宝辛亥銘鉄剣は唯一の剣である。出現時期は、剣が先出し刀は後出する。大陸では、後世まで武官が携帯するのは「剣」であることから、これがその象徴であったことがわかる。
- (10) 明器、つまり副葬するためにだけ製作されたものは古墳時代には基本的に存在しない。副葬品は全て実用品である。ミニチュアの明器などは存在するが、これは渡来人によって将来したものと考えられる。古墳出土の特殊な器種の須恵器などは、集落からの出土例が稀少なことから明器とする考えもあるが、詳細に観察すれば使用痕跡を観察できる場合が多い。また副葬品として出土する鏡や武器・武具などは、集落から出土する事は基本的にないが、これらも紛れもなく現実の世界で使用されていた品々なのである。
- (11) 紀元前後、亡骸をそのまま甕に納めるという風習は、インドシナ半島やフィリッピンなどでも行われた。特にベトナム北部のドンソン期には青銅製の棺、中部のサーフィン期には100cmを越える大形甕棺が盛行している。漢帝国周辺での共通した事象である。また、弥生時代の墓は方形を基調とするが、これについても四神、つまり神仙思想を意識したものであるとの説がある。
- (12) この世界観は、甕棺の時代に獲得したが、それが列島に広く流布することはなかった。しかし、卑弥呼は巨大な前方後円形の塚を築造した。遣使の返礼として魏の皇帝から「汝好物」を与えられた。その中に銅鏡がある。ここで言う「汝」とは、卑弥呼個人ではなく甕棺に鏡などを副葬していた北九州に代表される倭人を指すのであろう。
- (13) 一義的に金ぴかの装飾馬具を副葬しなかった訳ではない。墓主が持っていきかかったのは馬そのものであった。馬は高速大量輸送が可能なるものであり、当時の人々にとって最も入手を希望したものであった。馬は垂涎の道具であり、その所有は最高のステータスであった。馬具に限らず武具・武器・工具などの鉄製品をおしげもなく副葬することはあってもさすがに馬を副葬するのは勇気はなかったようだ。
- (14) 仏像を表現した鏡は、三角縁神獸鏡(3世紀)にも見られる。しかし鏡は道教のアイテムであるために、それが普遍化することはない。

《引用・参考文献》

- 尼子奈美枝 1991 「古墳時代後期の馬装の性格」『関西大学考古学等資料室紀要 第8号』 関西大学考古学等資料室
- 尼子奈美枝 2005 「馬具研究からみた古墳時代後期の階層性—馬具の所有形態と石室規模の相関関係から—」『馬具研究のまなざし』 古代武器研究会ほか
- 安藤 鴻基 1988 「房総古墳出土の馬具」『小台遺跡発掘調査報告書』 芝山埴輪博物館
- 青木 豊昭 1990 「丸山4号墳と馬具等出土遺物について—越前・若狭の馬具出土古墳の中での位置づ

けー』『福井県考古学学会 福井県考古学会誌』 第8号

- 石田 大輔 2011 「一夜塚古墳出土馬具の検討」『一夜塚古墳出土遺物調査報告書』 朝霞市教育委員会
- 石橋 宏 2011 『柴又八幡神社古墳Ⅷ(2分冊 考察編)』 葛飾区郷土と天文の博物館
- 石山 勲 1967 「環鈴の形態・年代と用途について」『金鈴 第20号』 早稲田大学考古学研究会
- 石山 勲 1980 「九州出土の環鈴について」『古代探叢』 一滝口宏先生古希記念考古学論集 早稲田大学出版部
- 岩崎 卓也 1990 『古墳の時代』 歴史新書46 教育社
- 植田 隆司 1999 「内彎楕円形鏡板付轡の馬装」『龍谷史学』 第111号
- 上田 万年 1993 『新大字典』講談社
- 宇野 慎敏 1991 「日本出土の冠帽とその背景」『九州上代文化論集』
- 内山 敏行 1996 「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』 八雲立つ風土記の丘資料館
- 大庭 孝夫 2011 「弥生時代葬送儀礼の様相」『研究論集 36』 九州歴史資料館
- 太田 博之 2010 「朝鮮半島起源の服飾・器物を表現する埴輪について」『古代 第123号』 早稲田大学考古学会
- 大谷 宏治 1999 「静岡県内古墳出土の馬具の集成」『石ノ形古墳』 袋井市教育委員会
- 岡林 孝作 1991 「冠帽」『古墳時代の研究 8 古墳Ⅱ 副葬品』 雄山閣
- 岡本 健一 1997 『企画展 さきたまに馬がやってきた!』 埼玉県立さきたま資料館
- 岡安 光彦 1985 「6～7世紀の馬具」『考古学ジャーナル』 No.257
- 岡安 光彦 1988 「心葉形鏡板付轡・杏葉の編年」『考古学研究』 第35巻 第3号 考古学研究会
- 岡安 光彦 1995 「馬具一副葬古墳分布からみる一」『古墳はなぜつくられたのか』 朝日新聞社
- 岡安 光彦 2003 「馬具生産と流通の諸画期」『七世紀研究会シンポジウム 武器生産と流通の諸画期』 七世紀研究会
- 小沢 洋 1984 「木更津市矢那大原古墳出土の二環鈴」『君津郡史文化財センター研究紀要』 II 君津郡市文化財センター
- 小野山 節 1979 「鐘形装飾付馬具とその分布」『MUSEUM』 No.339
- 小野山 節 1990 『日本馬具大鑑 第1巻古代上』 日本中央競馬会
- 甲斐 貴充 2011 『国際交流展 覇者の愛した煌めき 一六世紀代の日韓金銅製品一』 宮崎県立西都原考古博物館
- 片平 雅俊 1998 「馬具集成をおえて」『十王町民俗資料館紀要』 第7号 十王町民俗資料館
- 上林 史郎 2003 「古墳出土の冠一広帯二山式冠を中心に一」『古代近畿と物流の考古学』 学生社
- 河原 隆彦 1982 「第3節 馬鐸の出土及びその編年と考察」『長尾・タイ山古墳群』 龍野市文化財調査報告書Ⅲ 兵庫県龍野市教育委員会
- 川江 秀孝 1992 「馬具」『静岡県史』 資料編3 考古3 静岡県
- 川江 秀孝 1993 「静岡県下出土馬具の構造について」『静岡県の考古学』 植松章八先生還暦記念論文集『静岡県の考古学』 編集委員会
- 鹿野 吉則 1987 「大和における馬具の様相一鉄製楕円形鏡板付轡を中心に一」『同志社大学考古学シリーズⅢ 考古学と地域文化』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 桐原 健 1974 「鎮魂の鈴 一信濃後期古墳出土の馬鈴の性格一」『信濃』 第26巻 第4号
- 木許 守 2003 「鉄地金銅装楕円形鏡板の性格」『榎原考古学研究所論集』 第14 八木書店
- 木許 守 2003 「馬具の流通についての一視点」『古代近畿と物流の考古学』 学生社
- 久保 智康 1988 『知られざる古墳時代一その生産・技術を探る一』 福井県立博物館
- 車崎 正彦 2011 「魏晋鏡その他」『シンポジウムくもの」とくわど』 発表要旨料 東北・関東前方後円墳研究会

- 黒田 恭正 1988 「馬具の出土状態について」『日野昭博士還暦記念論文集 歴史と伝承』 永田文昌堂
- 群馬県古墳時代研究会 1996 『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』 群馬県古墳時代研究会資料集 第2集
- 小林 行雄 1962 「古墳文化の形成」『岩波講座 日本歴史1 原始および古代1』 岩波書店
- 国学院大学考古学資料館 1977 『考古学資料館要覧』 1976 関東の古墳時代文化 国学院大学
- 斎藤 弘 1984 「鈴杏葉の分類と編年について」『日本古代文化研究』 創刊号 古墳文化研究会
- 斎藤 弘 1990 「鈴杏葉の編年」『後期古墳出土共伴遺物複合編年発表要旨』 古墳文化研究会
- 斎藤 優 1970 『若狭上中町の古墳』 上中町教育委員会
- 早乙女雅博 1992 『伽耶文化展』 東京国立博物館
- 坂本 真鈴 1933 「環鈴に就いて」『考古学雑誌』 第23巻 第10号 日本考古学会
- 坂本 美夫 1985 『馬具』 考古学ライブラリー34 ニュー・サイエンス社
- 坂本 美夫 1996 「剣菱形杏葉類の分布とその背景」『考古学の諸相』 坂詰秀一先生還暦記念論集
- 坂本 美夫 1996 「剣菱形杏葉類と階層制とその背景」『研究紀要12』 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 澤村雄一郎 1996 『愛知県・岐阜県内古墳出土馬具の研究』 大学院考古学研究報告 第5冊 南山大学大学院考古学研究室
- 塩入 秀敏 1994 「長野県の馬具副葬古墳について」『長野県考古学会誌』 第74号 長野県考古学会
- 篠宮 正・小林基伸 1996 『特別展 大王の世紀 一兵庫の古墳と遺跡一』 兵庫県立歴史博物館
- 島田孝雄・金沢 誠 1996 「2. 旧山田郡」『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』 群馬県古墳時代研究会資料集 第2集 群馬県古墳時代研究会
- 志村 哲 1996 「3. 馬形埴輪の形態について」『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』 群馬県古墳時代研究会資料集第2集 群馬県古墳時代研究会
- 白井 宏子 1988 「冠」『物集女車塚古墳』
- 白石太一郎 1986 「巨大古墳にみる大王権の推移」『王権の争奪』④ 日本古代史 集英社
- 白石太一郎 1999 『古墳とヤマト政権』 文春新書036 文芸春秋
- 白木原 宜 1997 「古墳時代の鈴 一主として鑄造鈴について一」『HOMINIDS』 vol.001 CRA
- 白木原 宜 2002 「鑄造馬具の地域性一特に馬鈴について一」『月刊 考古学ジャーナル』 No.496 ニュー・サイエンス社
- 鈴木一有・斎藤香織 1996 「剣菱形杏葉出現の意義一伝岡崎出土資料をめぐる問題一」『三河考古』 第9号 三河考古刊行会
- 鈴木普二男 1983 『企画展 古墳時代の武具・馬具』 展示図録No.11 千葉県立房総風土記の丘
- 関 義則 1998 「環鈴についての覚書」『紀要』 23 埼玉県立博物館
- 関 義則・宮代栄一 1998 「県内出土の古墳時代の馬具」『紀要』 23 埼玉県立博物館
- 高崎 光司 1994 「環鈴研究の一視座」『日本と世界の考古学』 岩崎卓也先生退官記念論文集編集委員会 雄山閣出版
- 高田 貫太 2006 「5,6世紀の日朝交渉と地域社会」『考古学研究 第53号第2号』 考古学研究会
- 高橋 直美 1995 「冠帽考」『滋賀史学会誌』 第9号 滋賀史学会
- 高野 政昭 1995 「天理参考館所蔵の異形鏡板付轡について」『天理参考館報』 第8号 天理大学附属天理参考館
- 瀧瀬 芳之 1984 「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』 創刊号 古墳文化研究会
- 瀧瀬 芳之 1990 『東川端遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第94集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 瀧瀬 芳之 2012 「裝飾付大刀からみた武蔵・相模の後期古墳」『武蔵・相模の後期古墳』 東京都埋蔵文化

財センター

- 辰巳 和弘 1972 「平群氏に関する基礎的考察(上・下)」『古代学研究』 第64・65号 古代学研究会
- 辰巳 和弘 2004 「他界はいずこ」『王の墓と奉仕する人びと』 国立歴史民俗博物館編 山川出版社
- 田中 祐樹 2011 「造り付け立耳環状鏡板付轡の出現と展開」『歴史民俗研究第8輯』 板橋区教育委員会
- 玉城 一枝 1987 「中国・朝鮮系の文様をもつ馬具について」『同志社大学考古学シリーズIII 考古学と地域文化』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 千賀 久 1991 「3馬具」『古墳時代の研究8 古墳II 副葬品』 雄山閣
- 筒井 由香 1997 「3弓田遺跡第2次」『京都府遺跡調査概報』 第74冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 都出比呂志 1989 「古墳時代の中央と地方」『古墳時代の王と民衆』 古代史復元6 株式会社講談社
- 東京国立博物館 1992 『よみがえる古代王国 伽耶文化展』
- 永沼 律朗 1983 「鈴杵葉考」『古代』 第75・76合併号 早稲田大学考古学会
- 中村 潤子 1983 「広帯二山冠について」『古代学研究』 101号 古代学研究会
- 南雲 芳昭 1991 「群馬県における馬形埴輪の様相」『成塚石橋遺跡II』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 南雲 芳昭 1993 「馬形埴輪における騎馬の基礎的研究」『研究紀要11』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 西田 健彦 1995 「世良田諏訪下」『発掘された日本列島 '95新発見考古速報 朝日新聞社
- 中川 駿 1991 「Ⅲ. 馬に関する遺物、とくに馬具に関する調査研究—古墳時代を中心に—」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』 平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書 鹿児島大学農学部獣医学科
- 新納 泉 2011 「装飾付大刀分布の歴史的背景」『国際交流展 覇者の愛した煌めき —六世紀代の日韓金銅製品—』 宮崎県立西都原考古博物館
- 土生田純之 2010 「始祖墓としての古墳」『古文化談叢 第65集』 九州古文化研究会
- 樋口 隆康 2000 『大古墳展—ヤマト王権と古墳の鏡—』 東京新聞
- 廣岡 孝信 2011 『秋期特別展 仏教伝来』 檀原考古学研究所附属博物館
- 藤田奈美枝 1991 「古墳時代後期の馬装の性格」『関西大学考古学資料室紀要』 第8号
- 藤井 利章 1979 「家形石棺と古代氏族」『檀原考古学研究所論集』 第四 吉川弘文館
- 堀田 啓一 1967 「冠、垂飾耳飾の出土した古墳と大和政権」『古代学研究』 49 古代学研究会
- 松尾 昌彦 2005 「馬具研究と『分布論』」『馬具研究のまなざし』 古代武器研究会ほか
- 松尾 充晶 2005 「技術論からみた馬具研究史」『馬具研究のまなざし』 古代武器研究会ほか
- 水野 敏典 2003 「古墳時代中期の武器・武具にみる交流の諸相と斉一性」『古代近畿と物流の考古学』 学生社
- 宮代 栄一 1993 「5・6世紀における馬具のセットについて —f字形鏡板付轡・鉄製橢円形鏡板付轡・剣菱形杏葉を中心に—」『九州考古学』 第68号
- 宮代栄一・谷畑美帆 1996 「続・埼玉県内出土の馬具」『埼玉考古第32号』 埼玉考古学会
- 茂木 雅博 1993 『常陸白方古墳群』 東海村教育委員会
- 桃崎 祐輔 2004 「倭国への騎馬文化の道」『考古学講座講演集』『古代の風』 特別号No.2 市民の古代研究会・関東
- 安井 良三 1967 「我が国発見の金、銀製垂飾付耳飾り—装身具のセットについての試論—」『史想』 13
- 山田 良三 1974 「古墳出土の馬具」森浩一編『日本古代文化の探求 馬』 社会思想社
- 山田 昌久 1989 「日本における古墳時代牛馬耕開始再論」『歴史人類』 第17号 筑波大学
- 山尾 幸久 1986 『日本古代の国家形成』 大和書房
- 吉村 和昭 2003 「地下式横穴墓出土の甲冑」『古代近畿と物流の考古学』 学生社